他の弟子シンミアス曰く、「そを再聞するを得んか」。

ケーベス曰く「質問する時は、知らざることを明にし得るが故によき事也」。

ソ氏曰く「シンミアスよ、君は尙ほ知識は回想なりと云ふことを信ずる能はざる乎。」

シンミアス曰く「さるわけにはあらざれど、尙一應聞かまほし」。

ソ氏曰く「苟も人間回想すと云はゞ、必ずや以前に知る所なかるべからず。而して知識中には回想すといふことなかるべからず。即ち種々の物を見聞する時に、其物已外の物を回想することあり。例へば、人を知るといふことと、琴を知るといふことゝは同一にあらず。されど琴を見て、そを使用したる人を思ひ出すといふ事あり。これ即ち回想也。一人の友を見て、他の友を思ひ出すことある亦之に同じ。かゝる例は尠なからざる也」。

シ曰く「さなり」。

ソ氏曰く「馬又は琴を見て人を思ひ出し、繪を見て本人を思ひ出すことあり。故に、回想は、似たるものより生ずることあり、又は似ざるものより生ずることもあり。更に進んで考ふるに、今茲にいふ似たるもの以上に、即ち、木石の片々が相等しと云ふにあらずして、一切是等を超絶して、絶對の同等なるものなかるべからず。吾人はかく云ひて然るべきか。」

シンミアス、「しか云ひて可なり」。

ソ氏、「已に等しと云ふことを知れり。然らば、知るとは如何して知るか。前に云ひし種々のものによりて、等しといふことを認むるにはあらざるか。しかれ共、此等のものは、いつも等しといふ能はず、他の方法を以て之を見る時は不等の事もあり。これ等しきものが、等しからずと見ゆるなるか。等しといふことゝ、等しきものとは別也。されば等しき物が、等しといふ知識を生ずるなるべし。」

シ「尤も也」。

ソ「然らば等しといふことは、其考へを生じたるものに似ると似ざるとを問はず。つまり、或物を見たる時に或事が思ひ出さるるをいふ也」。

シ「疑なし」。

ソ「さて等しき木を見るに、其物が心に思ふ等しといふことゝ合するか」。

シ「然らず」。

ソ「されば、等しといふことを考へ出さしむる物と、等しといふ思ひとは合せず。從ひて、等しといふことは、物已前に學びたることなかるべからず。而してそれが、木により不完全ながらも回想せらるる也」。

シ「絶對に然り」。

ソ「故に等しき物を見ざる前に、等しといふ考なかるべからず。それが等しき物を見て思ひ出さるゝ也。されば、等しといふ考は、吾人の五官の作用によりて得たる知識にあらず、又吾人の五官より知識を得たるにもあらず」。

シ「然り」。

ス「然れば、其心にて考へる等しと云ふ知識は、五官にて感ずるより已前に有りたるものと云はざるべからず。從つて、吾人が生れて見聞せざる已前より、等しといふ知識を有せり、卽ち前生に已に之を有せし也。等しといふことに就いて、かく論じたることは、善又は正、等にも適用せらるべく、此等の知識は、皆吾人が此世に來らざる已前より所有せし也。

而してかやうなる知識を有しつゝ、之を忘れて記憶せざることあり。又忘れたるものを思ひ出すことあり。故に吾人が何事かを知ると云ふは、始めて知るにあらずして、思ひ出すに非ずや」。

シ「然り」。

ソ「是迄の所論の道理を考へ得るか、如何か、そは今云ふの暇なきも、總ての人が知識を有すとは云はれざるべし。併し、各人は其自知せることを心に思ひ浮ぶることを得るか」。

シ「然り」。

ソ「夫は何時學びしや。人と生れし後にあらずして、其已前なるべし。故に靈魂は、人の形を得ざる前より已に之を得てありしなるべし」。

此論を確むれば、靈魂が生前よりありしといふ義が成立する也。これがプラトーの理想論より起りし也。其說によれば、吾人はかつて理想界に居りしものなり。故に今は墮落して此界にあるも、理想界を回想

する所の理想を有する也。

シンミアスとケーベスとは問ふ、「靈魂の生前にありしことは之を了解せり。されど死後に存すること、未だ其意を得ず、敢て聞くを得んか」。

ソ氏答へて曰く、「ものには、散ずるものと散せざるものとあり。複雜なるものは散ずるもの、簡單なるものは散せざるもの也。複雜組織のものは常に變化せざるものにあらず」。

ケ「然り」。

ソ「前に云ひし善及び正、等は變化するや」。

ケ「變化せず」。

ソ「人馬等の動產は如何」。

ケ「變るべし」。

ソ「その變ずるものは手に觸れ、感覺に感ずるもの也。前の善及び正、等は、唯思想にして無形不可見のもの也」。

ケ「御尤も也」。

ソ「見ゆるものと、見えざるものとあり。見ゆるものは變るもの、見えざるものは變らぬもの也。吾人には身體と靈魂とあり。身體は有形にして見ゆるもの、靈魂は無形にして見えざるものなり。其靈魂は種々の事を思ふ。而して見又は聞きて思ふ時は、身體が靈魂を轉變なるものに引付くることあらむ。かくて靈魂は迷亂せらるゝことあるものなり。靈魂若し身體に關せずして純粹に不變不動なるときは誤ることなし。此狀態は吾人の智識也」。

ケ「然り」。

ソ「靈魂は何に似たりや」。

ケ「不變に似たり」。

ソ「されば、靈魂は眞正の不變、單一、不可分解のもの也。身體はその反對にして、穢れたる複雜なるもの也。然れば身體は解散するも、靈魂は解散せざる也。一見死後直に朽ち終るが如くなれども、靈魂は純粹不可見の幽冥界に入り、進みて神の許に至る也。故に靈魂は死後吹き散らさるゝものにあらず。さるを吹き散らさるゝと思ふは不都合也。故に人は哲學を研究して、よき處に行

くべし。然らずして、身體に執着し、不正を行ひ、亂暴を事としたるものは、死後高尚なる處へは生るゝこと能はずして、狼鷹等の動物となる。やゝ溫良なるものは蜂、蟻、人間となり、進みて智者となる也。されば汝等哲學を研究して、善處に行くべし」。

（已上は靈魂輪廻說にも通ず。此の說は理屈なき感情上の說明也。）

この時シンミアスとケーベスと囁き合へりしかば、汝等は余の說明に不服の點ありやとソ氏の問へりしに、二人は「然り」と答えぬ。

シンミヤス曰く、「靈魂の不滅なること信ぜられず。身體は琴の如く、靈魂は琴の整調の如きものなるべし。琴滅して整調なきが如く、身體滅して後、靈魂あるべからず。」

（此難は今日の唯物論者の口吻と同じ。）

ソ「猶ほ外に難者なきか。」

ケーベス「裁縫師あり衣を着る。一代の間に多くの衣を着たりとするに、彼の死するや、最終の衣は殘りて、彼は亡くなる也。今もかくの如く、靈魂が轉生して種々の身體を生ずれども、最後には身體を殘して靈魂先づ滅べし」。

ソ「御身等は余が先に知識は回想也と論じたることを許すや」。

二人「夫は許す也」。

ソ「されば、汝の云ふ琴の喩はこれに合せず。琴ありて、整調ありとせば、琴のなき前には整調なし。從つて身のなき前に心なしと云はざる可らず。然れば共知識が回想なりとせば、生前より心のあることを許すべからずや。故に、知識は回想也との說を許しつゝ、生前に心の存在を許さざるは自家撞着也。

更に論あり。物の明ならざる故を尋ぬるに、漸々外の事に移し行きて說明する法もあれど、夫は一向說明とはならず。これは奇麗也といふ、何故なればといふに、夫はかくの如き性質あり、かくの如く、感ずる故にといふ。かく外の方へもち行きては說明とはならざる也。そは、何故に奇麗なりやといふに、奇麗といふ本體がそこへ這入り居る故に奇麗と云ふ也。醜といふも亦然り。（これはプラトー氏の理想也）四角とは如何といふに、是はかく〳〵也と云ふが、これは說明にならずして、四角といふ理想あれば也。其理想は其反對を容れず。

奇數といふ理想は、偶數といふ理想を容れず。又其反對の部內に屬する事をも容れず、卽ち其偶數といふ部內には、二、四、六あり、故にこゝに奇數を容れず。又靈魂は生活か非生活かと云ふに、それは生活なり。而して生活の反對は死也。されば、靈魂は死てふ性質を容れざる也。かく論じて、靈魂不滅が確立するが故に、衣を着るとの喩も更に差支なき也」。

ソ氏は、これより種々の談話を爲し、惡を爲せば惡道に行き、善を爲せば善所に行くを得ること、安穩に死する事などを語り、クリトーが君の妻子を如何せんかと問ひしに、卿等自ら愼むに如かず」と語り、いかに君を葬らんかと問ひしに、「先刻より靈魂不滅の說を述ぶるに、尙ほ明ならざるか。身と心と別也。死後靈魂が他所に行きたる後に、尙ほ我が身などいふものあらんや」と語り、かくてを毒仰いで自若として息絕えぬ。

已上は『フェドー』に記されたる靈魂不滅に關するソ氏の對話の骨子也。

四　中世は靈魂不滅を信ずるのみにて、別にこれといふ議論もあらざりき。近世に至りても、宗敎者は別に論ずる所なきも、哲學者は種々に論せり。デカート氏、スペンサー氏、カント氏、ヒューム氏、スピノザ氏等は其主なるものにして、カント氏の靈魂論は特に有名也。カント氏は、學理上にては不明なれど實際上にては、靈魂不滅と思はるゝといふに結歸する也。ヘーゲル氏は高大なる靈魂不滅論を立てたり。氏の說は萬法唯心論にして、靈魂の外に一物なしといふ也。靈魂より萬有が開發し、萬有は靈魂の顯現也。從ひて靈魂を相對のものとせずして、絕對の神靈とせり。

終りに予が靈魂論を述べん。『骸骨』に論せしが如く、靈魂を以て自覺の一體なりとせば、不滅と云はざるべからず。理論上有るものが無くなるとは思はれず。複雜なるものは散ずるも、單純なるものは變化することなし。然れば、有は無にあらず、單一のものは變化せずと考ふるときは、靈魂不滅也。カント氏は、先天後天、可知不可知の區別を爲せり。而して靈魂は不可知なるが故

に道理にてこれを立つること能はざりき。然るに今、靈魂を自覺の一體と論決する已上は靈魂不滅と考へざるべからず。更に又靈魂の働きを見て、靈魂が無限に到達するといふ已上は、無限の生活を營まざるべからず。而してこの無限の間の生活は卽ち不死不滅也。これは轉化論を確めて後一層明白となるべし。

第五章　轉化論

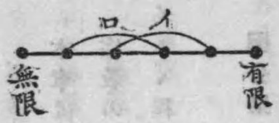
『骸骨』第四章參照

一體貫通　此一體貫通につき、カント氏は或時は不變なれど、萬古に不變ならずともよしと考へたり。されど此論は論理に適はず。其故は此一のものは一體になりてありて、夫が前に合して、後に分るゝといふならば、何時變化するも圖られず。故に變化を貫通するものにあらず。しかるに萬古に亘りて一體不變のものなかる可らずといふが今の所論也。一體貫通してあるものなければ、變化の說明とはならず。それが一體となれる時は、變化を說明し得るも、夫がくづれては、變化の說明が出來ざる事となる也。故に、或時は不變なるも萬古に不變ならずといふ說は論理に合はず。故に今は萬古不變の一體を以て說明する也。

第六章　善惡論

『骸骨』第五章參照

「善惡標準說」として『骸骨』に擧げたる四說を分類すれば左の如し。



第一
第二／倫理的見解
第三——宗教的見解
第四——哲學的見解

「善惡質量」の下

イとロとは同距離同量なれども、ロはイより無限に近し、故に高善といふべし。惡亦之に反對して知るべし。

第七章　安心修德

本章は宗教哲學中最も重要の點にして、已上の諸章は皆其準備也。宗教の領地は一種特別にして、他と異るものあり。世間より見て狂者とせらるゝ程のものが眞の宗教者なるべし。

因分果分　世の一切の事は因分果分、共に說くことを得れども、宗教にては果分は說き得ず。故に因分によりて、果分あることを知るもの也。不可說とか、絕對とかと云ふことを得るも、積極的に其實を說くを得ず。故に『骸骨』の此項にては果分に說き及ばざりし也。

因分二素　安心は知識か情感かの論あり。予思ふに、彼此差別の知識より、情感に進みたる所にて信仰と云はれ、安心と云はるゝ也。それより善に進むが修德也。今暫く安心を智的と云ひ、修德を行的と云ふと雖、其實は情感の一念に此二者を具する也。故に宗教は情感を主とする也。智は本來動くものなれば安泰の相なし。智が情に入りて始めて安住を得べし。

安心　『骸骨』に含藏無限とあるは、有限の內部に無限の含まれあることを云ふ。例せば「一切衆生悉有佛性」といふが如し。

他力門―無限を信ずる其心が、無限中の一部なるが故に他力也。有限の萬物に對する時の心は、有限也、自力也。されど無限に對する時の心は無限也、他力也。

修德

眞覺は一無限に對する心なれば一也。

妄覺は多數の有限に對する心なれば多也。

眞習・妄習、亦然り。

成道往生　他の宗教にては、此世にて悟りを開くといふことなき故に、成道といふことなし。又自力他力を明かして成道と往生とを分つが如きも、他の宗教に談せざる所にして、佛教獨特の長處也。

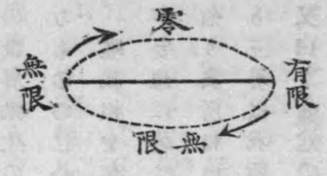
往生といふに就ても、耶蘇教にては、末日審判によりて、善處に行くと、惡處に行くとが分るゝと云ひ、埃及の宗教にては、末日の審判を信じて、身體の滅せざるやうに金字塔の中に藏して之を保存す。ソクラテス氏の說の如きは、轉生の思想なるべし。佛教の十界輪廻說亦之に類す。因果に大小高下あるが故に、十界轉生あると偶然にあらず。地獄等の十界は、吾人には總てが明ならざるも、これ吾人の知識境涯になぞらへたる說なるべし。夫が今日信ぜらるべき根據なきにあらず。吾人の知識に高下あるが故に、吾人の知識の及ばぬ所は上下共にあるべきなり。從ひて吾人の知らざる境涯は多く、直接に吾人の知る境涯は狹し。故に地獄又は天上は、吾人親しく之を見ずと雖、疑ふべきにあらず。たゞ知らざるを知らずとして、知の及ぶだけ考ふべし。

因果必然を嚴格に主張すれば、定道論となる也。今日の有樣は、昨日の結果にして、又明日の原因也。因果必然に起るとせば、十界の轉生は因果必然なれば、吾人の意志によりて變更する能はず。故に之を云爲するの要なきに似たり。何事も業報の必然なりとせば、善を爲し、惡を止むるといふには如何なる根據あるかとは、佛教上必要の議論也。因果は宗教に於て必要なる位置を占るが故に、因果を立てざれば宗教は立たざるや如何。佛教は定道論なれども、又其中に自由意志說ありて、其因果を自由にするやうに教ふる也。

かく論じ來れば、其解釋難からず。他力門にては自ら勵むことを要せず、純粹の因果也。自力門にては自由の原素を加ふべし。其の故は、無限有限に就いて考ふるに、有限に自由なし、無限に自由あり。其の無限の方にある自由は、吾人の指示の及ぶところにあらず。他力門にては、有限無限が別々になりありて、無限には圓滿なる自由の力あれども、有限には自由の作用なしと云ひ、自力門にては、因性無限を吾人の心中に認むる故に、無限が有する自由の力は、自分も具すると思ふが故に、勵み進みて修行するに至る也。他力門にては、吾人に自由の働きなし。總に自分の力と思へるものも、他力の回向也といふに至

るべし。故に他力門の方は、因果必然といふことと衝突せざるが、自力門には何の要ありて因果を說くや。因果は轉化の法則の上にあり、卽ち有限の上にあることにて、何事を爲すにも必ず因果あり。而して自由は無限のみにあり。しかるに有限無限は互に相離れず、無限に對して有限あり、有限に對して無限あるが故に、自由と必然とは相離れずして常に伴はざるべからず。其中に於て、吾人の認め得る所は有限必然の方也。されば吾人の働きは必然因果に上らずんば了解する能はず。これ自力門にも因果說なかるべからざる所以也。

樂土　時間空間は慥に定めらるべきものにあらず。一夢に三年十年のことを見、一念に百里千里を走ることあるが如し。無限の方より見れば、一念に三祇を具し、之を有限の方より見れば、三年十年三祇等となる也。空間より云ふも亦然り。無限より有限に對する行程は零にして、有限より無限に對する行程は無限也。



樂土
有形樂土……事相
無形樂土……理性
有形無形を含む樂土……事理相卽—今これを取る

比說　『法華經』に「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」とあり。靈魂進化は統一作用也。統一の行屆く部分丈は皆我有也。我心、萬有界に住めば、卽ち萬有は皆我有也。臣の功過、皆我功過とするは、明君也。一切我ものと全體を領すれば、卽ち靈魂開發の極度に達したる也。卽ち無限に到達せし也。『涅槃經』に「一切衆生悉有佛性」と云ひ、「如來藏」といふ、皆此境を云ふ也。こゝに云ふ我は、隔歷の我にあらずして、一切普遍の我也。

『十善法語』に曰く「此人ありて此道あり、外に向て求むることではない。此大

人ありて十善の道を全くす、今新に構造することではない。人々具足、物々自爾、法として如是ぢや。唯迷ふものが迷ふ、知らぬものが知らぬ斗ぢや。此迷ふ者、知らぬ者の爲に、佛の說示ありと云事ぢや。どう說示あるぞ、大體にかうぢや。『法華經』の中に「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」と。此中三界とは欲界、色界、無色界ぢや。男女の欲あり、飲食の欲あり、睡眠の欲ある世界を欲界と名く。此欲を離れて身心が禪定と相應する世界を色界と名く。此心が此質礙の色身を離れて、虛空と相應し、寂靜と相應する世界を無色界と名く。此般の世界、衆生の住所があるといふことぢや。此三界は十善全き所にて、大人たるものの己心中所領の地ぞ。其中の衆生は實の吾子ぞ。法として如是ぢや。唯我相を存する者が、自他の隔てを備へ自ら達せぬ。妄想に隨順するものが、妄想に蔽はれて、自ら達せぬのみぢや。若し自ら我相の本來空なることを知り、我所相の本來空なることを知れば、今日より三界は我所領ぢや。斯中の衆生は實々に吾子ぢや。」

又曰く、「通途の者は、我手に取らず、我眼に見ねば、我所領とも云はれぬ樣に思ふけれども、手に取るもの計が我物と云ふことではない。眼に常に見て居るもの計が我物と云ふことではない。千金の家翁も常に千金を懷にし居りはせぬぢや。家僕などに委せおきて、一邑一郡の主ぢや。大君の一天萬乘の主たるも、山海の廣狹、土地の產物、人民百姓の田穀財寶の員數まで、悉く知ることではない。民百姓の田地財寶はやはり、民百姓の田地財寶として、直に我有ぢや。功臣諸侯には一國二國を與へ、之を子孫遠裔に傳へ領させておきて、やはり我有の地ぢや。此譬喩にて知れ。眞修行の人は梵天へ昇て見ねども、十八梵天には靜慮の樂を得させおきて、我有ぢや、我子ぢや。無色界は見ずとも、又自身無色定を得ずとも、彼衆生に深禪定に入らせおきて、我有ぢや、我子ぢや。勇者は勇者、智者は智者、たとひ我膽力智慧は彼に及ばずとも、皆我有ぢや、我子ぢや、面白きぢや。富貴の者は富貴ながら、我有ぢや、我子ぢや。貧賤なるものは貧賤ながら、我有ぢや、我子ぢや、面白きことぢや。」

此法語は能く、無限の境に達したる人の心情を道破したるものにして、吾人の大に翫味すべきもの也。

成道可得　彌陀を立すること、ゴッドを立するが如くすべからず。何となれば、かくする時は、哲學にて破らるべければ也。若し哲學にて破られじとせば、彌陀を眞如とせざるべからず。然るに、今成道可得の項を以て立論する時は、彌陀の存在を證する論が確立する也。眞神存在と同じ方法にて證明すべからず。成道可得にて、本師本佛を云ふ時は、必ず實在を立論し得べし。

有限無限の一致

他力門　自力門

有限…+…無限　有限…+…無限—隱的

無限の行 $\frac{\infty}{\infty}$ 力の限無

=0……∞　不可定

無數劫

最極小より最極大に至る

頓極頓迷

予の宗教說と他の哲學說　是に於て吾人は、前來述べ來りし宗教に就ての說と、他の哲學說とを對說せんとす。

自由と必然との事は、無限に就ては自由、有限に就ては必然といふことを云ひたり。此義聊かカント氏の本體現象の論と同じ。彼の說は本體は自由、現象は必然と云ふにある也。

其現象本體と有限無限とは餘程樣子が異なる也。夫れに就いて、哲學の說と予の有限無限の說とを對照するに、哲學にては、唯物論と唯心論とは、必ず二つに別れたる說にして、唯物は唯心を容れず、唯心は唯物を容れず。されど、この有限無限にあてゝ見れば、有限に重きを置きしが唯物論、無限に重きを置きしが唯心論也。而して有限無限一體といふ時は、唯物一方にあらず、唯心一方にあらず、兩方を超絕したる說也。されば一元論にして而も體象論というて可也。（カント氏は本體と現象とを分かてり。）體象論といふ時は、現象は有限、本體は無限に當る也。然るに此體象論に就いて種々の見解あり、一は本體現象一體說にして、一は本體現象非一說也。スペンセル氏の體象論にては、本體

を不可知的とし、現象を可知的としたる點は、カント氏が物自身を超絶的と決したると同じ云ひ方也。理科學の研究の如きは、此現象世界の事物に關する學問にして、ス氏の進化論の如きも此範圍に屬する也。故に進化論がいかに完全に說明せられたりと雖、夫にて事盡くべからず、更に不可知的本體との關係を明にするの要ある也。此事はス氏流の學說にては到底明了にする能はざるが如し。『骸骨』に云ひし說にては、此點を迷悟の範疇によりて明にせんとせり。此の本體と現象との關係は、迷の內にては到底わからず、悟に轉じたる所にて、一種特別の智見を開きて、無限に對する關係を了する也。されば、吾人の有限無限說は、カント氏、スペンセル氏の體象論と少しく異る所あり。反りてスピノザ氏の本體論と似たる所あり。されどスピノザ氏は本體は絕對一也とすれど、『骸骨』にては無限は無數あり、卽ち或は有限が各、無限也、或は無限となる(成佛す)と說けば、吾人の心體其儘有限無限の一致也。要するに、有限無限と區別すべきに非ずして、絕對なりと云ふ也。故に其一種特別の智見の開けたる已上は、有限無限を超絕して、絕對的の活動を爲す也。此點より云へば、吾人の見解は、ヘーゲル氏の絕對開發論、或は絕對理想論に類す。此見地よりして云へば、迷もなく、悟もなく、有限無限もなく、唯絕對也。迷卽悟、有限卽無限、煩惱卽菩提といふ考になる也。(ヘーゲル氏の論の價値は『哲學史』に讓る。)

『骸骨』の說は、ヘーゲル氏の論に類すると共に、ライブニッツ民の單子論の如き說相をも有す。ラ氏は、一の單子が開發して神となるといふやうに說けども、ヘ氏は之と異り、初より絕對が進みて相對に顯はるゝと云ひ、それが更に再び絕對に歸するといふ也。

吾人の說が、かやうに種々の哲學說と關係を有する事なるが、夫等の諸說が吾人の說によりて、調和せられたりや否やは保證し難し。敢て後賢の判斷を待つ。

『骸骨』の說を簡單に見んか。先づ萬物あり、萬物中に我心あり。其萬物を認むるは又我心也。心の中に萬物が入る。甲の心と乙の心と一也、甲卽乙也、乙卽甲也といふ說也。而して何故に甲卽乙なるかといふ說明に、聊か骨折りたる積り也。

予の宗教論と他の宗教諸說

- 宗教說
  - 反面—無神
    - 獨斷的—神は存在せず。
    - 批判的—神の存在の證明が成立せず。
    - 不可知的—神の存在は知る能はず。
  - 正面—有神
    - 多神—有限の神が澤山あるといふ也。
    - 一神（凡神）
      - 單神—無限の神が一ありといふ也。
      - 凡神—多數の有限が、其儘に無限の一神なりといふ也。

是等の諸說に就て、吾人の所思を述べん。獨斷の無神論は、吾人の有限已外に、別に無限存するにあらずといふ說に合す。批判論は、神があるともなしとも決着せざる說故に、吾人の說に合せず。不可知說は、有限が未だ開發せざる時には、無限を知る能はずといふ見解に似たる所なきにあらず。批判論、不可知說は眞の無神論にあらず。故に何等の功能を爲さゝる說と見て可也。多神論は、吾人が無限が無數なりといふ說に聊か合する所あり。されど通常の多神論は、有限の神が無數にある如くなれど、夫にては多神と云ふ可らず。眞の多神ならば、無限が無數ならざるべからず。一神論は、唯無限の一方面のみを認めたる說と見れば可也。凡神論は先づ多神論と一神論との中間の說也。されども、其中間といふ考が、無數の有限と唯一の無限との一致を認めて居るだけにて、無數の無限といふことを含畜せざるが如し。夫にては未だ充分とは思はれず。此無數の無限と云ふ事を云ふにあらずんば、開發進化といふ事は少しも云はれざれば也。

宗教と道德　道德は有限が有限に對する働き也。吾人人類が已に彼此向ひあひて居る已上は、共に有限也。而して此有限の間の關係が道德也。然るに其有限なるものは、獨立自存する事能はずして、互に相依り、相助けて居らざるべからず。（此點を深く究むれば、有限は終に無限に依らざるべからずといふ事となり、從つて道德は宗教に依らざるべからずといふ事となる也）。而して有限相依るの關係には、二方面なかるべからず。其一は自己保存にして、其二は同類保存也。故にこの二方面の關係を全うするが道德にてある也。道

德の原則はこれより出づる也。

先づ自己保存には、自分の欲する所なかるべからず。同類保存には、之を他に施すといふことなかる可らず。故に倫理の格言には、「己の欲する所、之を他人に施せ」といふ、これ正面の格言也。其反面も亦一原則にして、「己の欲せざる所、之を人に施す勿れ」といふ、これ也。此二の正面反面の原則が充分に行はれさへすれば、倫理こゝに立ち、道德自然に行はるゝ也。東洋倫理卽ち支那の道德にては、反面を敎へ、西洋倫理卽ち歐米の道德にては、正面を敎うる也。カント氏の倫理、耶蘇敎の倫理亦然り。此二面を併存して道德の原則とするが、「諸惡莫作、衆善奉行」と敎うる通途の佛敎也。玆に注意すべき所は、この欲する所と、欲せざる所とを分つ標準いかゝといふ事也。之を解して、そを主觀的良心の上に置かんとするあり。此說は實踐上には適切なれども、誤謬の來るを保すべからず。故に吾人は客觀的に善惡を置くを要す。善惡をおくとせば、そが標準なかるべからず。然るに通常の倫理にては、この標準を定むること容易ならず。之に反して、宗敎によるときは、容易に此標準を定め得べし。已に善惡と云へば、斷じて宗敎に係らざるべからざることは、『骸骨』に述ぶるが如し。されば、道德は是非共、終極は宗敎に入らざるべからざる也。

道德上にては、此原則に基いて、所謂德なるものを說けり。卽ち、欲する所を施すとは仁也。欲せざる所を施す勿れとは義也。而して此仁義の二德は、東西兩洋の倫理共に之を敎ふ。此外の諸德は、皆此二德に攝まる也。此二德を正面德、反面德と云うて可也。しかるに、己の欲する所、欲せざる所といふ時は、各自の思ふまゝに任すといふことと混同するの恐あれば、能く考へて誤のなきやうにせざるべからず。夫を裁斷するが智德也。愈々仁義に過失なきに至りても、猶實行するに難し。之を敢て行ふを勇とす。勇は卽ち勢力也。此勇氣を養ふこと大切也。勇氣を養ふには、其本となるものなかるべからず。信は正に是也。我心に信ずること深ければ、千萬の難をも排して事を行ふ。信はこれ中心の至誠也。至誠あらざれば勇氣なし。されば道德上にて最も大切なるは信なり。而してこの至誠の信は、宗敎によらでは養ひ難し。宗敎上の信仰の確立する時に、至誠の心あるべし。故に道德は宗敎に至らざるべ

からず。

かく論じ來れば、仁義智勇信は、前の二原則より出づるものと考ふるを得。されど道德上の德は、必ずしも幾個と定むべきにあらず。何れの一を取るも他は皆攝まる。一德諸德を兼具し、一卽一切也。これ東西倫理の敎ふる所也。ソ氏は一德に諸德を具すと云ひ、佛敎にては一卽一切と云ふ。併し一乃至五、等の數を定めて、之を原德とすることあり。例せば仁を原德とし、忠恕を原德とし、智仁勇、仁義禮智、仁義禮智信を原德とするが如し。是等の德を行ふに就て道生ず。其道は卽ち有限と有限との關係にして、種々あるべし。大體は人類としての道、國民としての道、家族としての道、等と分るゝ也。人類としての道とは、朋友の道にして、友誼信實也。國民としての道とは、忠君愛國也。家族としての道とは、親子兄弟夫婦の道也。道德哲學にては、是等の道を詳しく研究するの必要あり。されど今は、之を精しく究むるの要なし。

然りと雖、此道に就て注意すべきことあり。通常此道に就て義務といふ事あり。西洋倫理にては義務をやかましく云ふ也。こゝに義務と云へばとて、一面に必ず權利を具するものなりと云ふべからず。道德上の義務には權利なし。よしこれありとするも、そは人間以外の權利にして、人間上には、これなし。通常の權利義務は、人間以內の事也。吾人は、かく權利なき義務にては、滿足をする能はず、又これを行ふ能はざるべし。故にこれを行はしむる或者がなかるべからず。卽ち義務には權利あるか、さなくば制裁なかるべからず。是に於て道德は宗敎に入らざるべからず。宗敎は道義の權利也、制裁也、天帝也、善惡因果の制裁也。善惡因果てふことは、宗敎ならではあるべからざる也。かく吾人は宗敎によらずして、道義を實行することは容易ならざる也。

更に道德に就て、先に施す施さずと云ひたるが、何を施し、何を施さゞるか。其實物如何。施不施の實質は、吾人有限にとりて必要なる者ならざるべからず。仁をせよと敎ふるが、果して何を惠めよといふ乎。其實質を考ふるに、要するに精神上身體上に必要なるものならざるべからず。精神上の必要物の極點は如何といふに、幸福或は安心立命なるべし。されば、施とは、安心立命を施せよと云ふこと、又勿施とは、安心立命を妨ぐるものを施す勿れと云ふこと

也。即ち人を悟に導くが仁也、人を迷ひに導かざるが義也。此點より云ふも、道德は安心立命を敎ふる宗敎によらでは、其の實質を得る能はざるが故に、宗敎によらざるべからずといふことを知るべし。

如此、道德は其外形に就ても、實質に就ても、宗敎によらずしては完全を期すべからず。道德のみによるも、幾分の道德は行はれ得べしとするも、宗敎によらでは、到底完全の實行に達し得べからず。故に道德の根底には、必らず宗敎なかるべからざる也。

第二篇　敎理

第一　在床懺悔錄

引

『在床懺悔錄』とは先生自ら題し給ふ所也。明治廿八年の春、大濱西方寺の病床にありて、筆を執り給ひしものにして、總じて二十四篇より成る。先生が當時の信念を基礎として、淨土眞宗の教義を説明したまひたるもの也。

一。佛陀と因果

佛陀も因果を動す能はずと聞く。阿彌陀佛も願行(因)成就(果)の軌に從ふと云ふ。然らば、佛教に於ては、因果を以て最上無上の法となすや。

曰く。因果は相對界の理法也、豈に絶對ならんや(『宗教哲學骸骨』を參照すべし)。佛陀(特に阿彌陀佛)は其本體は固より絶對なりと雖、其衆生に對する場合、或は現に衆生界(相對界)に化現せる場合に於ては、亦相對界の理法に順從せざるを得ず。久遠實成の阿彌陀佛も、衆生濟度の爲めには、相對因果法に依らざる能はず。故に殊に法藏比丘となり、無上不思議の因源果海を垂れ給ふ。阿彌陀佛のみならず、他の一切諸佛も亦同じく、因位願行の成就によりて、各、度生し給ふ也。是れ佛教に於て、報身佛の重切なる所以也。是れ眞宗に於て、久遠十劫兩佛中、特に十劫正覺に就て濟度の教ある所以也。(久遠佛は絶對佛、十劫佛は相對佛也)。

夫れ此の如くなるが故に、佛教に於ては、因果は最も重要の理法也。然れ共無上絶對の法にはあらざる也。

二。佛陀の存在

佛陀は佛教の根本觀念なるべし。然るに現實に其觀念の如き實體存在する事、甚だ認了し難し。證明如何。

曰く。人間を以て萬物の靈長と認むるものは、佛陀を發見する事能はざるべし。然れ共、人間が靈長なりと云ふ證明ありやと云ふに、決して之ある事なし。若し理論に就て求むれば、吾人の不完全なる事、容易に證明し得べし。知至らざる所あり、能及ばざる所あるを以て考ふ可し。然るに此の不完全中に勝劣上下ある事亦瞭々たり。是等の事實より推察せば、吾人人類より遙に優等の靈物あること、粗ぼ想見し得べきなり。而して又更に、吾人々類のみならず、一切の生類(衆生)(或は無生類も)皆開發進化の物體なる事を合採し來れば、下等の生類は次第に上等に進化し、吾人々類も、亦次第に優等界に開發すべきを知る。此の如き開發進化は何底に達して止まるべきや。理論上に於ては無限の開展を許さゞるを得ず。果して然るか、此無限開發の體卽ち是れ佛陀也。

更に轉じて依立獨立の觀念よりせば、獨立は絶對存せざる可らざるを知らむ。此獨立の絶對は卽ち佛陀也。(「宗教哲學骸骨」參照)

三。無限と心靈(パーソナリチー)

獨立無限の存在は之を領す。然れども是れ非心非靈のものにあらずや。而して佛教所說の佛陀は、常に心靈たるが如し、如何。

曰く。獨立無限は、無限の性能を具せざる可からざること言を待たず。其心靈的性能を完備すること勿論ならずや。且つ思へ、吾人人類すら心靈的のものならずや。(其心靈は有限劣等なるにもせよ、心靈なり)。然るに最上優等の獨立無限、豈に非心靈なりと云ふ可けんや。否、獨立無限こそ、眞に完全無缺の心靈たる可けれ。然れども、偏頗邪惡の心靈にあらず。悲知圓滿の心靈なり。

安心の道に自力他力の兩門あり。然るに獨り他力門をすゝむるは如何。

曰く。すゝむる所は、漫に他力門と云ふにあらず。他力門中の他力門、卽ち阿彌陀如來の攝化(弘誓)に歸命するの一途なり。『骸骨』に論ずるが如く、自力門にあれ、他力門にあれ、悟道の時限に於ては、二門各〻頓極頓速の一念成就より、三大僧祇の永劫迄、其差別實に無限の不同あり。而して緩漫なる長時の間には、退轉墮落の患多きが故に、能ふべくんば、極速の捷徑を取るべきと論を待たざる也。然るに自力の途に於ては、自己の佛性開發を基趾とするが故に、必ずしも極速の圓覺を期し難し。或は極遲の開悟を漸達するあらん。是れ豈に不安の道にあらずや。而して他力門に於ても、其歸する所の佛威に依て、或は漸悟の惠を受くるに止るあらん。然れども、彌陀の弘誓は決して然らず。其威德最勝にして、其悲智極圓也。一念歸命の立所に不可思議の佛因を滿足せしめ、現生命終の無間に安養淨界の往生を遂げしめ給ふ。是れ豈に大安慰の途にあらずや。心を佛法に傾け、念を正覺に懸くるもの、誤て大利を失する勿れ。

五。彌陀の弘誓

他力門中の他力門、略、命を聞く。之を彌陀の弘誓と稱する如何。

曰く。弘誓とは、弘く一切衆生を濟度せんとの誓願なり。抑、佛道修行の人士は、彼の一種我儘流のもの(聲聞緣覺、之を二乘と云ふ)を除くの外は、皆自利利他の心情よりするものなり(菩提薩多、或は單に略して菩薩と云ふ、大心有情の義なり。大心とは、自利と利他との二心を完うするを云ふ。有情とは、情識卽ち心靈を有するものと云ふ義なり)。之を願作佛心(佛に作らんと願ふ自利心)、度衆生心(衆生を濟度せんとする利他心)と云ふ。此二心は、共に願望心にして、其至切なるや、終に誓願心となる。而して、諸佛中の王たる阿彌陀如來の利他心は、自利の全體を賭物として、一切善惡の凡夫、惑染、逆惡、謗法、闡提の徒に至るまで、一も漏さず、度し盡さんとの大誓願なり。故に名けて弘誓と云ふ。是れ極尊の佛陀に必ず存せざる可からざる所、亦他佛の完具する能はざる所なり。故に、彌陀と云はゞ、弘誓、弘誓と云はゞ、彌陀と解しても可なり。或は誓願不思

議、或は願力不思議等と云ふも皆同一なり。仰いで信受すべきなり。

六。誓願の顚末如何

曰く。誓願の詳細は、門に入りて考究せずんば、領解し難かるべしと雖も、其概略を述べん。抑、阿彌陀如來は、其本、久遠實成の古佛にして、諸佛の本師本佛、(本師本佛の詳義別に考究すべし)佛陀中の元祖なり。常に無緣の大悲に促されて、度心遣る方なく、茲に大方便により、現じて法藏比丘となり、第五十四佛(世自在王佛)の所に於て發心立誓し、非常の修行成就して、遂に吾人往生の大途を開き給へり。今其經文を略擧せば、左の如し。

時有國王聞佛所說云云。

設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆誹謗正法。

兆載永劫、積植菩薩無量德行、不生欲覺瞋覺害覺、不起欲想瞋想害想云云。

而して、誓願項數總じて四十八願、皆度衆生の爲ならざるはなし。法然上人、之を概說して曰く、(『選擇集』の文)。而して親鸞聖人之を該攝して四法を建立し給ふ。『敎行信證』是なり。其敎は『大無量壽經』、行は南無阿彌陀佛(十七願成就)、信は三信一心(十八願成就)、證は必至滅度(十一願成就)なり。他力眞宗の綱領、盡して此四法に在り。仰いで奉持すべし。

七。諸經を措いて『大無量壽經』を取るは如何

曰く。他經は皆是れ自力門の經なるが故なり。

八。佛一代四十八年所說其經甚だ多しと聞く而して『無量壽經』の外他は皆自力門の經なりとせば佛出世の本懷は自力の開悟を勸むるものにあらずや

曰く。固より自力の開悟を欲するものは其途に從ふべし。經文の多少に遲疑すべからず。自他力二門の取捨に就ては、先に論ずる所判然たり。請ふ茲に略論せん。『大無量壽經』に曰く、

今日世尊、諸根悅豫し、姿色淸淨にして、光顏巍々とまします。明なる淨き鏡の表裏に影暢するが如し。威容顯曜にして超絕し玉へること無量なり。未だ曾て殊妙なること今の如くましますを瞻睹せず。(乃至)何が故ぞ威神光光たること乃爾ると。(乃至)佛(釋迦佛)の言く、善き哉や阿難、問ふ所甚だ快し。(乃至)如來無蓋の大悲を以て、三界を矜哀し、世に出興する所以は、道敎を光闡して群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり。(乃至)阿難、諦聽せよ。今汝が爲に說かん。對て曰く、唯然り、願樂して聞かんと欲ひ上る。

と。而して所說何事ぞ。彌陀の因源果海、願行成就の外なし。是豈に釋迦佛出世の本懷、全く此經說に在るの自證に非ずや。尙ほ觀小二經に亘りて討究すれば、覺えず首肯する所あるべし。今之を略す。有志の士、門に入りて之を問へ。

九。觀小二經とは何ぞや

曰く。『觀無量壽經』(略して『觀經』と云ひ)『阿彌陀經』(稱して『小經』と云ふ)、共に『大無量壽經』(略して『大經』と云ふ)の附帶經なり。其所說は、『大經』中の一分を開展布衍したるものに過ぎず。故に『大無量壽經』を擧ぐれば、二經は從て攝在するなり。然れども、宗義考究の爲めには、此二經は『大經』を反照して甚だ重要なる趣味あるものとす。中に就いて『觀經』は諸行に對して念佛の功能を顯揚し、『小經』は唯念佛の一行を擧げて、其大善根福德の妙因たるを稱讃す。而して共に轉じて『大經』純他力の法門に歸入せしむるもの、實に『大經』と並んで宗門の妙典たるなり。仰いで尊誦すべし。

一〇。行とは南無阿彌陀佛(十七願成就)とは如何

曰く。凡そ一定の事を成さんと欲せば(發願)、之に應ずる勤勞(修行)なかる可

らず。佛道に於ても亦然り。願行具足して、始て證果に達するものとす。今彌陀大悲の攝化に於ても、衆生が安養界に往生せんと願ずる、豈に行なくして可ならんや。此に依つて、阿彌陀如來は自己の名號を以て、衆生往生の大行と爲し給ふ。卽ち正しく衆生攝取を誓ひ給ふ。第十八願に「乃至十念」と願じ給ふは、何を念ずるやと云ふに、全く南無阿彌陀佛の名號を稱するに外ならず。此の如く、南無阿彌陀佛の名號は、衆生往生の大行なるが故に、行は南無阿彌陀佛と云ふ。而して此名號は、第十七願に於て、十方諸佛悉く咨嗟して、我名を稱せずば、正覺を取らじとありて、大悲を衆生に傳へ給ふ導器なり。乃ち此願の成就に應じて、十方の諸佛は皆悉阿彌陀の名を稱揚讃嘆し給ふなり。釋迦佛の『無量壽經』を說き給ふ亦是なり。衆生は此賞讃を聞きて、卽ち大悲の存在を領納するを得。是れ全く第十七願成就の賜なり。

一一。願行具足して證果を成ずるは可なりと雖是れ自力門の敎相にあらずや而して今純他力門に於て大行ありとは如何

曰く。善哉問や、請ふ一喩を擧げん。珠玉の價千金なるありとせんか、之を購はんと欲するものは、勤勞を以て千金を積まざるべからず。然るに茲に富人あり、彼を憫んで云く、我に歸服せば、直に千金を以て汝に投與せん。其人忽ち歸服して、千金以て珠玉を購ひ得たりとせんに、此千金、依然千金たりと雖、全く自力勤勞の成果にあらざる也。我等衆生が、無始の迷惑を斷じて、大覺圓滿の佛果に至らんとする、豈に大行なくして可ならんや。南無阿彌陀佛は、正しく其の大行なり。然れども、衆生の自力に成れる行にあらず、全く大悲回向の賜なり。第十七願成就に因り、十方諸佛が、彌陀の名號を稱讃し給ふを聞いて、之を信順する一念の立所に、如來大悲の願行を、一身に受領するや、思內にあれば、行外に現はるゝ風情に、乃至十念の稱名念佛、是卽ち往生の大行たるなり。

一二。乃至十念の稱名念佛とは如何

曰く。乃至とは多少を限らざる言葉なり。十念より、多くとも、少くとも、可なるを、乃至十念と云ふ。經文、或は「乃至一念」ともあり(成就の文)。十念の念は念佛なり。念佛に、實相の念佛、觀相の念佛、等あり。今は夫等と差別せんが爲めに、稱名念佛と云ふは、南無阿彌陀佛と口頭に稱揚するを云ふなり。此念佛一遍にても、二返にても、乃至十遍、百遍、千萬遍、盡形にても可なりとの意を乃至十念と云へるなり。蓋し大悲の攝化に遇ひ奉りて、信心歡喜の輩、其事情に依りて、一遍二遍、乃至一生涯、南無阿彌陀佛を稱揚して、報恩の誠を表するを乃至十念とは言ふなり。

一三。乃至十念は往生の大行なりや或は報恩の經營に過ぎずや

往生の大行と、報恩の經營と、全く符合するを以て、乃至十念の正意とす。左に其概要を述べん。

先づ彼の千金珠玉の喩に就いて見るべし。富人の千金を惠與せるは、以て珠玉を購ひ得させんとするなり。而して受者の之に對する報恩は乃ち如何。素貧の身、固より一物の以て謝すべきなし。彼富人も亦一物を欲することなし。唯受者をして、其意中の寶珠を得しめたきのみ。然れば則ち受者たるもの、其千金を以て彼の珠玉を購求して、歡喜愛賞せば、是ぞ則ち施主の恩義に報するなる。施者亦此を見て、無上の滿足あらん。今彌陀他力の念佛は、何の爲ぞと云ふに、以て衆生をして、往生の珠玉を得しめんとするにあり。衆生は則ち南無阿彌陀佛の眞意を受領して、信心歡喜し、彌陀誓願の指命に隨順して、乃至十念以て往生を決定せば、是ぞ則ち正に大悲弘誓の大恩を報謝するものなる。夫れ此如くなるが故に、往生の大行が卽ち報恩の經營と、全く符合するものなり。

一四。報恩の經營と往生の行業と符合せざることなしや

答。必ずしも無しとは云ひ難し。是れ眞宗に於いて、一大問題の存する所

なり。今其概要を云へば、往行と報謝と符合するが他力門の眞相なり。若し夫れ二者相別離せば、是れ念佛門中の自力門(卽ち二十願)にして、他力の念佛を以て自力の功能と爲し、其念稱の數量(遍數)に應じて、高下の果報(九品等)を得んとするものなり。此門に於ては、往生の高下は、全く自家奮勵の多少にあるが故に、只管行業の積集を求むるのみ、何ぞ報恩經營の餘地あらんや。故に此門の行者は、奮勵策勵、晝夜幾萬遍の念佛を稱ふる、其外見最も殊勝なりと雖、其實未だ大悲弘誓の眞相に達せざるものなり。是れ何邊より來れる誤なりや。他なし、大悲弘誓、純他力不可思議を堅信する能はずして、尙ほ自家昧劣の微功に眷々たるが故なり。若し夫れ眞正の純他力門に入れるものは、信後の稱名、全く憶念心の煥發による報恩謝德の經營にして、其往生の大行たるは、蓋し如來の誓願、此の念佛を以て、衆生往生の券證と爲し給ひたるが故、然かく名けたるに過ぎざるなり。決して其念稱の多少によりて、往生の一段に影響することなきなり。事情極迫の場合にありては、よし一回の口稱に發せざるも、心に南無阿彌陀佛往生之業と堅信すれば、業事全く成辨するものなり。

一五。報恩の經營は不斷相續するものなりや將た間歇的のものなりや

答。堅信より起る自然の表果たる報謝の念佛は、不斷的なるべき筈なり。然るに茲に考ふべきことは、過去の慣習なり。彼の墜石が一旦他力に支へらるゝと雖、尙從前の惰勢を以て壓下するが如く、金剛心の無間に、憶念不斷心は發すと雖も、無始以來迷倒の習性(「衆生貪瞋煩惱中、能生淸淨願往生心」、「煩惱にまなこさへられて、攝取の光明見ざれども、大悲ものうきことなくて、常に我身をてらすなり」、「貪瞋の煩惱は、しば〳〵起れども、まことの信心は、かれらにもさへられず。」等)は、常に明眼を翳掩しつゝあるなり。今之を有限無限の關係に就いて說かんに、有限は各々別立のものなりと思ひて、曾て我他彼此の念を忘るゝ能はざりしも、一旦無限に對向し來れば、主伴互具の關係瞭然として掩ふべからざるに至る。而して一旦瞭然たりし關係は、常に相續して、永劫不斷たるや勿論なりと雖、有限個立的の宿習は、尙ほ其習慣惰勢を奮つて、常に此主

伴互具の關係を壅蔽せんとしつゝあるを免かれざるなり。此に依つて、或は正念或は妄念と、現生の間は正邪が交代して止まざるあり。之を假に數學式に示さんか、卽ち左の如し。

$C\infty - a \times \infty = \pm b$

$C\infty$ は constant Infinity 卽ち彌陀力。

a は variable quantity of daily impure actions.

$a \times \infty$ の ∞ は finite inertia of past lives.

$\pm$ は Pure or impure.

b (o.....∞) は variable quantity of present actions.

a の變化は cd の二 factors の積樣による。其 c は, constant 或は neutral と云ふべき因, 卽ち吾人の心力 (mental energy) にして, d は variable (淨穢相代的域は oppositional (正邪隨一的) と云ふべき緣, 卽ち心外の事情 (environment or circumstance) なり。(a∞cd)

d=e+f.　e=bodily constitution 體狀　f=external circumstances 境遇

命終の時は a=o となるが故に、

$C\infty - o \times \infty = \infty$ (a=o となるは a=cd の d=o となるによる)

となりて、瞑目の立所に、大覺々了の大果を得るなり。

註。此數學式の考究に就いては、書簡集に收むる所の人見忠次郎氏に宛てられたる明治廿八年一月廿九日の書簡、及び稻葉昌丸氏に宛てられたる同二月一日の書簡を參照すべし。

一六。南無阿彌陀佛の解釋如何

曰く。梵語也。歸命無量壽如來と譯す。無量壽如來に歸命し奉るの意也。善導師之を釋して「言南無者卽是歸命、亦是發願回向之義」と云へり。眞宗の金註玉解となす。請ふ其意を略辨せむ。

抑も南無の梵語には、歸敬、恭敬、歸禮、等種々の譯語ありと雖、歸命の翻語最も適切也。我眞宗の開祖親鸞聖人亦力を盡してこの翻語(歸命)を解釋し給ふ、甚だ旨ある也。蓋し、歸命とは命令に歸順するの意にして、尊者の命令に應じたる歸禮、恭敬にして、漫然たる歸敬禮拜にはあらざる也。今他力門信者の阿彌

陀如來に歸するは、信者の方より求めて之を爲すにあらずして、阿彌陀の方より、爾すべしとの命令に應じて之を爲す者也。一家に之を本願招喚の勅命に歸すといふ。而してこの歸命の事たる、全く次の阿彌陀佛に固屬の事たることを忘るべからず。通常の歸敬禮拜、卽ち有限者の有限者に對する歸敬禮拜は、能歸者と所歸者と其根本を異にして、彼の行は彼にありて此に屬せず、此働は此にありて彼にあらず。然るに有限者の無限者に對する行爲に至りては、全く其趣を異にし、有限者の行爲は一應有限者の自能より發するが如しと雖、一歩を進めて討究すれば、其行爲は全く無限者所屬の者にして、有限者の活動は全く無限者活動の範圍內に包括せられ居らずんばあらず。然らずんば、無限者は眞の無限者たる能はざるべければ也。衆生の阿彌陀佛に歸するや、其事一見衆生の行爲に似たりと雖、其實全く阿彌陀佛の指命に順ずるに過ぎざる也。(機法一體、衆生の三業と佛の三業と云々。『安心決定鈔』? を見るべし)。

是を以て、「言南無者卽是歸命」と譯して、更に「亦是發願回向之義」の文あり。卽ち「是發願回向之義」とは、此歸命の事たる、全く阿彌陀佛の嘗て發願して、其功德を我等衆生に回向(付與)し給ふの意也と云ふにあり。已にかくの如きの歸命なるを以て、其事たるや、自力雜念の竄入すべきなく、專心一意大悲の告命に隨順乘托するにあり。自己全身を擧げて、大願業力の不思議に依憑するにあり。之を橫超他力の金剛心と云ふ。蓋し、彌陀回向の歸命の一心は、これ凡夫自力の迷心にあらず、他力授傳の佛心にして、其堅實なること金剛の萬石に碎破せられざるが如きをいふ也。歸命の解釋大略是の如し。細詳を欲するの士は、更に開祖『行卷』の妙釋を仰窺すべし。

次に、「阿彌陀佛卽是其行」とは、卽ち上の如く彌陀大悲の勅命に歸順したる者は、卽ちこれ安養の往生を欲する者、何を行じてか、其目的に稱ふべき。悲願指定の其通り乃至十念の稱名念佛卽ち其行也。何を以て稱名念佛にかくの如き大功德かある。他なし、彌陀佛、兆載永劫修行の功德利益を集め盡して、成就し給へるもの、卽ちこの稱名念佛なれば也。一聲稱佛の立どころに、往生の業事成辨する、豈に其處ならずや。之を「阿彌陀佛卽是其行」の大意とす。尙ほ阿彌陀佛の譯語につき、無量壽、無量光、十二光等の事あれども、今は之を略す。『顯

名鈔』?を見るべし。)

因に問ふ。稱名とは阿彌陀佛と稱する事なるべし。今の釋にも「阿彌陀佛卽是其行」とあり、然るに稱名念佛と云ひ乍ら、常に南無阿彌陀佛と稱ふるは如何。

答。南無の二字は前文に云へるが如く、全く阿彌陀佛の四字に附屬して離れざる言葉也。衆生が彌陀に對する時は、是非共歸命せざる能はず。故に稱名念佛と云はゝ、南無阿彌陀佛と稱ふることと知るべし。經證を擧げん。『觀經』下品段に曰く、「應稱無量壽佛……稱南無阿彌陀佛……稱佛名故……」。

一七。信とは三信一心(第十八願成就)とは如何

曰く。信仰の宗敎に重要なること辯を待たず。宗敎とは信仰、信仰とは宗敎を云ふ事なるを見て知るべし。

宗敎の大體に於て然り、佛敎に於ても豈に然らざらんや。八宗の祖師、龍樹菩薩は「佛法大海信爲能入」と說けり。佛敎全體に於て然り、他力眞宗に於て豈に然らざらんや。豈に唯然るのみならんや。信仰の他力眞宗に於ける、實に絕待不共の價値あるを忘る可らず。『大無量壽經』には、之を至心信樂欲生(我國)と誓ひ、信心(歡喜)と成じ、『觀無量壽經』に至誠心、深心、回向發願心と表し、『阿彌陀經』には一心不亂と示し給へり。眞宗の第二祖天親菩薩は(世尊我)一心と云へり。此等の所說、其外見異なるが如しと雖、其實皆橫超他力の堅信を陳ぶるにあり。此に依つて、宗祖は親著『信文類』に於て、此三信(至心、信樂、欲生)一心の一異に就きて、特に懇到なる說示を垂れ給へり。其概要を略述せむ。至心と云ふも、信樂と云ふも、欲生と云ふも、其言葉異りと雖、要するに有限の我等衆生が無限大悲の阿彌陀如來に對するの心にして、所謂行者歸命の一心なりと云ふにあり。今箇別に之を述ぶれば、至心は卽ち誠實不安の意にして、衆生の佛に對する、固より然らざる可からざる也。(虛妄不實の行はるゝは、有限と有限との間にあり。今有限の無限に對する苟も一點の不實あらんか、無限は忽ち之を照破し盡して、一毫を許さゝる也。故に有限の無限に對するや、徹底の眞實

至誠ならざるべからず。）

次に信樂は如何。是れ亦誠實不妄の心ならざる可らず。凡そ所謂信仰或は信心と云ふもの、若し一點の虛妄不實を交へんか、是れ卽ち信仰信心にあらずして、新考別想と化し去るもの也。而して有限の衆生が無限の大悲尊に對する信樂、豈に一毫の虛妄を添ふ可けんや。故に彌陀の弘誓を信じて安養の往生を樂ふの心、豈に誠實ならずして可ならんや。

次に欲生の心は如何。是れ亦有限の衆生が無限の阿彌陀佛に對し、其淨土に往生せんと欲するの心、豈に一點一毫の不誠を容る可けんや。

之を要するに、三段の心は皆共に有限の無限に對する眞實心にして、毫末の虛妄不誠を容れざるの心也。是れ卽ち念佛行者の彌陀に對する歸命の一心也。夫れ唯歸命の心也。知るべし、他力回向（授傳）の心なる事を。夫れ唯他力回向の心也。知るべし、凡夫虛妄の心にあらずして、徹底至誠の佛心なる事を。（儒者をして云はしむれば、一毫人欲の私を交へざる至公至誠の道心なりと云はん乎。）夫れ唯佛心也。以て佛果を開くの佛因とす、眞に其處を得たるを知るべし。念佛行者淨土往生の大因、全く此の信心にあり。豈に絕待不共の妙心ならずや。『觀經』の三心、『阿彌陀經』の一心、等今は之を略す。篤道の人、宜く入門而問すべし。

一八。三信歸一の義略ぼ聞くを得たり何故に三信を區別するか未審請ふ之を說明せよ

曰く。是れ他力の信心を顯揚せんが爲、最も妙趣の存する所。先づ有限無限の關係に就いて見よ。有限が無限に對するや、有限は能求者にして、無限は所求者也。而して既に無限を求め終るや、無限は能持者にして、有限は所持者也。求持の關係完了して、茲に無限の指命に順ずる有限の作用の顯はれ來るを見る。

（有限—能求　無限—所求）
（無限—能持　有限—所持）

（有限――能作　　無限――所作）

夫れ此の如く、有限無限の關係に三段の階次あり。是れ卽ち至心、信樂、欲生の三信なかる可らざる所以也。卽ち第一の至心は、衆生(能)の佛(所)に對する至誠心也。第二の信樂は、衆生(所)が佛(能)の大悲を信受する深信の心也。（衆生は受者、佛は授者なるが故に、佛と衆生能所たる也）。卽ち正しく他力の信心獲得の地位也。第三の欲生に至りては、信樂の其儘に、彌陀の淨土(所)に往生せんと願ずる心(能)にして、他力回向の發願心也。三心の當相此の如くなるが故に、第一第三は、衆生の方に能動ありて、佛の方は所動也。唯第二の信樂のみは、佛の方に能動ありて、衆生の方は所動也。故に若し此の第二段の地位に代ふるに衆生の能動を以てせんか、三者悉く衆生の能動となりて、其信相全く自力の發心と化了する也。第十九願の至心・發願・欲生、第二十願の至心・回向・欲生、以て見るべし。唯第十八の三信には、中間の信樂、卽ち他力回向の眞心あるが故に、前後の二心も、皆悉く融して他力の眞心と化し、三信悉く他力眞實の信心を成ずるに至る。（悟りて後、始めて佛になりたるにあらず、無始本來の佛陀たる風情也。）

欲生の心は信樂より起りたるが故に、他力なりといふのみにあらず。第一の至心も審考すれば、蓋し彌陀弘誓の成就によりて、逆惡の我等が殊勝にも至心の誠を呈するに至りたるを領する也。三信の要、略、上述の如し。大海深廣涓滴の盡す所にあらず。大根の士入りて探解せよ、左右に寶珠を獲む。

（至心―自力……（他力）
信樂―他力（他力）
欲生―自力……（他力）

（至心―自力
發願―自力
欲生―自力

（至心―自力
回向―自力
欲生―自力

一九。信と行との關係如何

曰く。佛法の修道に於ては、信より行を起し、行によりて果を證するを常軌とす。他力眞宗の信者は、稱名念佛を以て其行とす。而して信既に他力回向の信心なれば、行も亦他力回向の佛行たる事勿論也。「朝な〳〵佛と共に起き、夕な〳〵佛と共に臥す云云」。（『安心決定鈔』）。是れ卽ち前段所提の乃至十念の稱名念佛也。今其模樣を略說すれば、他力門の信者、其信心獲得の上は、金剛の

堅信深く心底に充實して、長時に相續して間斷ある事なし。而して此の堅信の內因、必ず自然に外用に表發し、乃至十念の起行となる。而して堅信の不斷相續なるに應じて、起行も亦不斷相續するやといふに、然る事能はざる也。其故如何となれば、外用は卽ち身體の模樣に依て、甚しく左右せらるゝ者なるが故に、若し外境にして身體を他に誘動しつゝある場合にありては、稱名念佛其所を得ざる也。啻に外境のみならず、內にありて、彼の無始已來、曠劫流轉の習性は現在の煩惱妄想と相結托して、常に正念の發動を妨害するを怠らざる也。是れ亦稱名念佛の表發を削減する一因也。夫れ此の如くなるが故に、大信大行は双翼不離の法也と雖、實際の發作に於ては、種々の狀態に轉ずるを免れざる也。然れども此に依て以て、他力回向の信行に不足ありとすべきにあらざる也。適、以て自己の罪惡深重なることを反省し、益、以て大悲の深重なるを自解するに足るべき也。(此に就き機法二種の深信といふ事あり。機の深信とは我身の罪惡深重なるを確信する事にして、法の深信とは、大悲救濟の廣大なるを深信する事也。詳細は入門而問に讓る。)『和讃』に曰く、

彌陀の名號となへつゝ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　佛恩報ずるおもひあり。

二〇。四法の建立にも教行信證と行を先にし信を後にし今の『和讃』にも稱名を先に出し信心を後に屬す是れ豈に佛法の通軌信行證の次第に違ふにあらずや將又格別の由あるか

曰く。大に由あり。是れ卽ち他力の眞相を揭出するもの也。佛敎の通軌といふは、解し易き自力門の次第を言へるのみ。一歩をすゝめて、他力門の眞相に入れば、信行の次第は轉じて、行信の次第とならざる可からざる也。抑、行の行たる所以は、由て以て果を證する爲め也。而して、他力門の信者が

淨土往生の大果を得證する其本行は、行者自力の修行にあらず。彌陀大悲が曾て永劫に修了し給ひたる廣大難思の妙行にあり。此行若し成就し給はざりせば、今日の我等衆生、何の緣ありてか、是の如き大果を速證し得んや。乃至十念の稱名は、彼の妙行の功德利益を衆生の方へ回向し給ひたる表發に過ぎざる也。是を以て、衆生往生の大行は、衆生獲信の前に在りて、十劫の昔既に修成し了り給へる也。衆生の方に於て、切迫の場合にありては、一聲の稱念を發せざるも、尙ほ可なる所以、全く此に在り。蓋し、乃至十念の願文に應ずる信後の起行は、往昔長劫に法藏薩多の修成し給ひたる大行の反照射影に過ぎざる也。尙ほ乃至の置言に就いて、深旨の存する所を察すべし。然して、乃至十念の稱名は、信者に在りては、全く報恩謝德の念なる事、前の『和讃』の如しと知る可し。

二一。信心の重要なる事略ぼ聞くを得たり然るに茲に一疑あり惡逆の

凡夫が獲信の一念に往生の業事を成辨するといふは豈に甚だ怪事ならずや若し果して然る事あらんか是れ全く因果の理法に背反するものにあらずや

答。二種の解釋あり。今一往の說明を用ゆれば、此廣大難思の信心を獲得するは、何れの衆生も無差別に此大惠に浴するにあらず。唯宿因(宿善)深厚のものゝみ大信を發得するに止まる。卽ち深厚なる宿善の原因ありて、他力の大信の結果を獲得し、更に他力大信の原因によりて、報土往生の大事たる結果を成辨するにあるが故に、その中間、毫も因果の理法に破綻ある事なきを知るべし。(無宿善の機は、決して信心開發の幸惠に預る能はざる也。)

次に第二解は、佛法全體(否な宗敎全體)に於て、常に不可思議の一段を存する

より説明するものにして、其實哲理の源底に一大不可思議の横ると同一樣のものなりとす。他なし、有限無限の成立に關して、劈頭一大不可思議の存すればなり。如何にして、二者の存在する事ありやの疑問是れ也。有限あれば、無限なかるべからず。無限あれば有限なかるべからず。何に由て、有限なるものありや、何によりて無限なるものありや。一方は他方より化轉したるものか。如何にして、無限より有限を化轉し得るや。或は如何にして有限より無限を化轉し得るや。此疑問は假令、百千の明哲出づるも、到底解釋し能はざるの疑問也。佛教自力門に於ては、無明初起の難問となり、又更に無明斷盡の難問題となる。前者は屢、常談に上る所なれども、後者も亦同一の難問題なる事を一言せば、漸教にあれ、頓教にあれ、自力の修行が、如何にして無限を覺了するの大行(無限行)を成就し得るや、是れ決して存する能はざる所也。若し夫れ、無限の時刧を經て成就すとせんか、是れ卽ち大覺其期なき事を飾説するに過ぎざる也。有限の範圍内に無限を產出すといふは、到底不可思議といふの外なし。是に於てか、悉有佛性の説、其猛勢を逞うするに至る。何となれば、若し夫れ一切衆生に悉く佛性を具有せんか(有限内部に無限性を包有せんか)、佛性轉じて佛陀となる、(無限が現じて無限に活動する)、豈に何の不可思議か之れあらん。唯些かの外緣を待つべきのみ。飛花落葉、青山流水、皆以て悟道の大緣たるに足る也。本來面目の現前する、何の難事か之れあらん。

夫れ然り、悉有佛性の妙談、實に不可思議を斷じて可思議たらしむる魔説也。然れども、請ふ一考せよ。是れ唯不可思議を拂ふに、他の不可思議を以てしたるのみ、一難を滅して、更に一難を生じたる者に過ぎざる也。何となれば、衆生有佛性とは、抑、何たる難題ぞや(有限内に無限ありとは、哲理の第一義を破滅し去るの自家背反にあらずや。)之をしも解し得べしといはゞ、將た何事か解し得べからざらん。然れども、之を領納せずんば、忽ち前の難題に窮困せん。豈に進退維れ谷るにあらずや。否な進退谷るにあらず、吾人の世界觀は何處にか、必ず一不可思議を許容せざるべからざる也。强いて、此不可思議を除かんとするが故に、此の如き窮谷あるのみ。今夫れ他力門の不可思議、亦何ぞ之に異らん。衆生(有限)が往生(無限に達する)の業事を成辨するは、他力不可思議の

攝取に遇ひ奉るが故也。是れ實に不可思議の幸慶也。然るに、茲に不可思議を認容せずして、更に信心開發(無限因を獲得する)の原因を求めんか、是れ宿業の開發によるといふの外なき也。(悉有佛性と心性に無限を附與せず、曠劫多生の流轉中に無限因を積集せんとする也。)然れども、これ一往然るべきが如しと雖、更に一考すれば、到底無用の飾說たるを知るべし。卽ち彼の曠劫の宿世に善因を積集すと雖、無限の時劫は、現に經過し了せりといふ可からず。未來に亘りて、尙ほ無限ならざる可からず。然らば、往生の眞因たる信心(無限因)を獲得するに相當すべき善因は、未來無限に至らずんば、成就する能はざる可き也。過去現在に此地位に達せるものある可からざる也。これ卽ち所解の本題に背反撞着するものにあらずや。過去現在の獲信の原因を討究して、過去現在に獲信の事ある能はざる事を斷證するもの也。夫れ然り、故に、吾人は到底不可思議の存する事を許容せざる可からざる也。而して此許容たるや、唯他力門のみの事にあらず、自力門にも同一の許容なかる可からざる也。否な哲理の源底に一大不可思議を許容せざる可からざる也。難者須らく諦念すべし。

二二。獲信の段落によりて如何なる風光かある

答。獲信の得益、甚だ夥多なりと雖、一括して之をいふ時は、宗敎の目的を遂成して、信者の心底一大安心の現起するに在りといふべし。發して而して情に發する者を歡喜の心といふ。『經』に曰く「聞其名號信心歡喜」と是也。而して、此歡喜の心たる、一旦現起の上は、永く繼續して絕せざる事、尙ほ憶念の心、相續不斷なるが如し。此心轉じて萬多の場合に表發し、信心の一生をして悠々樂しむ所あらしむる事、推して想察すべし。然れども、此心亦間斷なきにあらず。彼の報謝の稱名と同じく、間歇交遞を免れざるあり。その理由も亦彼の場合と等しく、曠劫流轉の迷習の惰勢に壓迫せらるゝに由るもの也。然れども若し夫れ、煩惱其勢を減じて、正念剋復の時には、常に鬱然として煥發し、信者をして、恰も既に極樂界中に在るの思あらしめ、或は身自から既に佛陀たるの思念

に住せしむるに至る。……「心は淨土に住み遊ぶ」……「信心よろこぶ其人を、如來と等しとときたまふ」……以て徵すべし。

然れども、茲に註記すべきは他なし、信心決定の行者、必ずしも忽ち全く佛陀と化し、常に淨土に住するにあらざる事是也。彼大悟の大士も、亦悟後の修行の完からざる間は、生身の佛陀にあらざるが如し。是に由つて眞宗念佛の行者、其信心實に金剛の堅きを持すと雖ども、若し夫れ煩惱紛起して、邪念强盛の時にありては、或は惡魔外道に近似する事なしと云ふ能はざる也。穴賢〳〵。

「貪瞋の煩惱はしば〳〵起れども、まことの信心は彼等にもさへられず、顚倒の妄念は……云々」

信者たるもの、此の如きの場合に遇はゞ、速かに心身を安靜にして、深く小心恐戒すべし。

二三。證とは必至滅度(第十一願成就)とは如何

曰く。證とは果にして、眞宗念佛行者の究竟最後の目的は、必ず滅度(大般涅槃)に到達するにあるを云ふ。是れ彌陀佛の四十八願の第十一に誓ひ給へる所なり。其文に曰く「設我得佛、國中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺」と、卽ち前段所說の信行に依りて、彌陀佛國に往生したる人天は、定聚の位に住して、必ず滅度に至らずんば、正覺を取らじとなり。此願文甚だ簡短なりと雖、其中幾多の問題の存するを見る。(第一)人天とは如何。(第二)定聚とは如何。(第三)滅度とは如何。(第四)定聚、滅度の差別關係如何。(第五)卽得往生とは如何。(第六)不退轉とは如何。」の四問は、其顯然たるものなり。

第一。國中人天とあるは、畢竟二者を擧げて一切を總標したるものなり。彌陀佛國の住民は、皆悉其內證彌陀同一の佛陀にして、彼此平等毫も等差あることなし。然れども、其從來の故鄕に順じ、或は淨國莊嚴の爲等の因緣に依り、或は菩薩、或は聲聞、或は人、或は天、等種々の變現あるなり。『經』にも「但因順餘方故有天人之名」ともあり。此等の研究は今茲に盡すべきにあらざれば、之を畧す。要するに、深く人天の二字に拘泥すべきにあらざるなり。

第二。定聚とは、或は正定聚と云ひ、正しく大涅槃を證すべきに定まれる聚類の義なり。邪定聚、不定聚に對して、最も優勝の地位たるなり。『經』に曰く「佛告阿難、其有衆生、生彼國者、皆悉住於正定之聚、所以者何、彼佛國中、無諸邪聚、及不定聚」と。不定聚とは、大果證得の定まらざる者、邪定聚とは種々迂回の上、漸く大果に到達する者、此等に對して正定聚とは速疾直達、大果を證得する者なり。此に疑問の生ずる所以は、此の如く正定聚とは速疾直達、大涅槃を證するものと云ふ、其速疾直達とは如何。開祖の判釋は命終直達の事とし給ふ。之に依りて現生正定聚の因あり。即ち他力眞宗の念佛行者は、獲信の立處に現生に正定聚の位に住すると云ふにあり。然るに、經文に又曰く「即得往生住不退轉」と、此不退轉と云ふは、再び迷界に退轉せざる位にして、前の正定聚のことなり。其「住不退轉」の上に「即得往生」とあり。故に淺薄の眼にては、往生したる上、彼土に於て不退轉に住する事なりと云ふ。前の願文にも「國中人天」と置いて、不住定聚とあれば、此れ亦彼土不退の事と爲す。果して然らば、現生正定聚、現生不退轉の證左は何れにありや、是れ一大問題なり。斷じて曰く、即得往生の一句を熟讀すべし。若し衆生が信心決定の即座に、直に命終得生すとせんか、即得往生亦何の他意もなきなり。然れども、事實決して然らざること言を待たず。獲信の已後に尙娑婆に滯留するもの比々皆然り。只千萬或一、獲信臨終のものあるのみ。若し獲信は必ず臨終の一念に限るとせんか、即得往生、亦何の他意もなかるべし。然れども、經文に其制限を見ざるのみならず、理の亦據るべき所なし。此に依りて之を觀れば、「即得往生」とは、信心發得の行者は、其信決定の立處に、淨土に往生すべき大利を得了する事ならざるべからず。而して得の字義たる、全く此意に契當す。所謂「ウベキヲエテンズル」と云ふ是なり。此大事治定して、而して現生娑婆在命の間は、是れ人間にあらず、未だ佛陀にあらず、即ち正定聚不退轉の住人なり。之を平生業成の大意とす。平生業成とは、我等凡夫が臨終を待たずして、平生に往生の業事を成辨し了すること是なり。詳細は門に入りて尋ぬ可し。(有限無限の關係に就いて之を云はんか、有限が一旦無限に對する關係を認得するや、翻つて前の有限個立の思念に返る能はず。主伴互具の關係は、湛然として不動なる、是れ所謂不退轉の義相なり。豈

に來生を待つの必要あらんや。現生速達なること勿論なり。）

第三。滅度は卽ち前に云へるが如く、大涅槃にして、眞宗念佛行者究竟の目的なり。而して其事たる、佛界不可思議に屬して、有限凡愚の測量し得る所にあらずと雖も、所謂彌陀佛同等の圓覺にして、悲智圓滿の極果たるなり。夫れ然り、然るに玆に小疑の存するは、彌陀は卽ち諸佛中の王、光明中の極尊にして、最極至尊の覺體にあらずや。然るに凡愚無智の我等衆生が、忽ちにして此無極尊と同等の圓覺に達すと云ふは、豈に餘りに過格の事ならずやと。是れ小由あるが如しと雖も、而も全く誤謬の迷論なり。蓋し彌陀佛の至尊なるは、固より論なし。然れども、彼の諸佛中の王、光明中の極尊と云ふは、是れ相對論上の事也。若し夫れ內證絕對門に就て云はゞ、佛々平等にして、決して等差あるべきなし。今我等が往生の卽時に、彌陀同體の圓覺を開くと云ふは、此平等門上の談なり。若し夫れ相對差別門上に於ては、或は種々の差別もあらん。因緣の存する處、固より相當の區別あるべきなり。然りと雖も、此の如き差別は內證の大覺上に於て毫も損益なき所なり。更に彼の大覺其者に就て熟察せよ。所謂始覺本覺還同一致にして、始めてと思ひて覺りて見れば、何ぞ圖らん無始已來の本覺不增不減常住昭々たるなり。所謂本來の面目卽ち是れなり。此本覺、此面目、彼此の不同あるべき筈なく、一味平等にして更に差別なきなり。之を「如衆水入海一味」と宣へり。而して此大覺の頓速なるを以て、敢へて疑を容れんとするは、是れ未だ彌陀願力の絕大卓越なるを熟解せざるものなり、何ぞ論ずるに足らん。曾て必至滅度の大果を思ひ、竊に想像すらく、彌陀弘誓の大願業力は、夫れ絕大の火炎團の如きか、其宿善の機に對するや、恰も流泉に濕へる薪材に接するが如く、烈しく全材を熱すと雖も、不遏の注流亦之を冷濕して、纔に冷暖を交遞せしむるに過ぎず。然れども、若し夫れ一旦命終の期に際せんか、恰も泉源梗塞して流注の玆に止みたるが如く、猛焰忽ち全材を燒盡して、火氣炎々亦彼此の別なからしむるに至る所、卽ち是れ同體一味の大覺圓滿に似たるものあるかと。此比喩寔に迂拙なりと雖も、夫れ或は速證法性の一端を推想するに足らん。敢て附贅す。

第四。住正定聚、必至滅度の大要は、前二段に略說するが如し。此兩者は其

に信心の利益にして、一は現生に屬し、一は當生に在り。(然るに二者共に現生の一益としたる一益法門の邪義なるものあり。好學者は問うて考ふべし。)是れ然らざるを得ざる所にして、敢て遲疑の容るべきなきが如しと雖も、經文の言句に拘泥して、亦二益共に當生にありとする(二益法門にして、現生を取らざる)ものなきを保し難し。請ふ少しく論定せん。

夫れ信心の開發は何生にありや。勿論現生也。而して現生の最後、卽ち臨命終時と限るべき制限なきこと前に云へるが如し。然らば則ち現生中、時を撰ばずして信心は開發し得べきなり。既に信心開發せんか、其所に一段の得益なくして可ならんや。彼の正定聚不退轉は、正に此益たるべきなり。他言を以て之を說かんか、箇存の有限が、始めて無限に對する關係を覺知するや、其の有限は最早從來箇存の觀念を脫却し、有機組織の觀念に轉入す。是れ一段の歷然たる變轉なり。而して此新觀念たるや、決して消滅することなく、永く相繼して不變たるや勿論也。豈に正定聚不退轉にあらずや。而して此時若し恰も命終せば、直に大般涅槃の妙果を覺得するとあるも、是れ亦偶然の投合のみ。若し夫れ信者尙ほ現生に存命せんか、其間は前の定聚不退の位に繼在して、尙ほ所謂穢土の假名人たるなり。而して正しく命終の時至りて、茲に始めて大般涅槃の極果に昇る。是れ豈に更に一段の得益に非ずや。而して其事たる必ず然らざるを得ざるなり。他語を以て之を說かんか、有限無限の關係は顯現して、有機組織の觀念既に明なりと雖も、如何せん前業の所感は、依然として有限の狀態を脫せしめざるなり。是れ云はゞ有限を表とし、無限を裏とする位にして、卽ち先の定聚不退なり。然るに業報茲に盡きて、有限の狀態亦消散し去らんか、無限の狀態は忽然として表面に現じ來りて、有限の狀態は深く裏面に潛伏する也。之を大般涅槃の證果とす、豈に亦必然の事ならずや。夫れ此の如く、獲信と命終と二箇の事情あるが爲めには、其得益亦現當の二段に亘らざる可からざるなり。豈に一益の邪義に迷ふ可けんや。豈に亦當來二益の妄說に惑ふ可けんや。

是に由て、更に經文を展閱すれば、彌、此關係を明にし得べきを見る。先づ彼の卽得往生住不退轉の文段を見よ、是れ十八願成就を說ける文にあらず

や。第十八願は、卽ち主として十方衆生の信佛因緣を願ぜる者なり。而して其成就の文に不退の益あり、是れ卽ち現生不退にあらずして可ならんや。進んで第十一願文を檢する、是れ亦甚だ解し難きを見ず。彼の國中人天とは、國中人天たるべきものを指せるなり。國中人天たるべきものは、現生には定聚に住したること勿論にして、證果は必ず滅度に至るにあらずんば、正覺を取らずと云ふ意なり。若し又現生住正定聚の暇なくして、臨終獲信の機は、直に大涅槃に至ると雖も、其實定聚の益を併せて、滅度に至るなりとの意あり。是れ定聚滅度を一願中に合誓し給ふ所以なるか。尙第十一願成就の文は、其訓讀左の如し。

「佛阿難に告げ給はく、其れ衆生の彼の國に生ずる有らんものは、皆悉く正定の聚に住せり。所以は何となれば、彼佛國の中には、諸の邪聚及び不定聚たりしもの無ければなり。

信前有限　信後現生有限無限　當生無有限限

凡夫　正定聚　滅度

（註）、「是に由て」已下は先生の草稿には、自から「已下可削」と書き添へられしも、今之を除去するに忍びずして附記せり。

在床懺悔錄　畢

第二　他力門哲學骸骨試稿

引

此篇は明治三十一年の一月より三月にかけて、逐日記されたるものと覺ゆ。原稿は美濃青罫紙、同赤罫紙、半紙青罫紙、赤の原稿紙等四通りほどの紙に記さる。而して、先生自ら之を一線のこよりもて綴りおかれぬ。題號は先生自ら附し給ふ所に頗ふ。各節の番號は、編輯の際之を附せし也。最後の四三、四四、四五の三節は他の諸節と異りたる紙に記され、共に綴られてあらざりしがども、其意に於て本篇に續くものなれば、本篇の後に掲ぐることゝしぬ。本篇の結尾には、何等の記號をおき給はざりしより見れば、此の稿はこれにて了るつもりなりしや、尙ほつづけ給ふつもりなりしや、明ならず。兎も角に未定稿たること疑ふべからず。先生此篇を記し給ふ時、大濱四方寺におはしぬ。

他力門哲學骸骨試稿

一。宗　教

宗教は何物なりや、其定義區々にして、一定する所なきが如し。曾て『宗教哲學骸骨』の英譯あるに際し、數者を列擧したり。今之を復載すれば左の如し。

* * * * * * *

註。先師の原稿には此間をあけおかれたり。讀者は英文『骸骨』第一章を參照せられて可也。

之を要するに、區々の定義其言説甚だ多樣なりと雖も、其目的とする所に至りては、彼此一樣に、皆安心立命を求むるを以て極致とするにあるが如し。是れ卽ち宗教の本相を示すものにして、亦其必須不可缺の要事たるを説くものなり。今其本相の成立を檢するに先ち、宗教の必要を一言せん。

宗教が何故に必須不可缺の要法なりや。他なし、其目的とする所の安心立命とは、他の雜多の要法と同じく、拔苦與樂の要事なればなり。蓋し吾人の生

活上の實際に於ては、何を以て業務とするか、皆離苦得樂の事にあらざるはなし。故に苦を拔き、樂を與ふるの方法は、其何たるを問はず、皆以て吾人必須のものなりとす。農商工藝の技術より、政治教育、文明の諸務に至るまで、其最後の目的は、皆吾人の苦痛を減拔して、吾人の歡樂を增與せんとするものにあらざるはなきなり。果して然らば、今宗教は則ち吾人社會に於て、實に必須中之必須件、不可缺中の不可缺業と云はざるを得ず。何んとなれば、吾人の歡樂苦痛なるものは、其數千種萬樣なりと雖も、其要全く精神的の現象なるが故に、今其精神の本源に就て、安心立命の大樂を與る宗教は、是れ卽ち必須不可缺の要法なりと云はざる可からざるなり。

夫れ然り、宗教は此の如く必須不可缺の要法なり。然るに、吾人動もすれば、此を誤了し、宗教を以て全く好事家の一業の如く看過するものあるは、是れ果して何と云ふことぞ。宗教家其人の開導足らざるに起因する所なりと雖も、而も世人自ら迷盲の謗を免かるゝことは能はざるなり。若し夫れ、宗教にして好事家の一業ならんか、彼の政治、法律、農、商、工藝、尙然りと云はざるを得ず。

是れ豈に事理を解するものゝ言ならんや。宗教の世に功を立つるの少き、豈に偶然ならんや。

又更に一謬あり。宗教の人心を感化し、社會の勢力なることを認め、以て之を政治上の一機關となさんとするものあり。是れ亦誤了の甚しきものなり。何んとなれば、目的たるべき宗教を以て、手段たるべき政治と其處を變へんとするものなればなり。蓋し政治は外形上の事に就て、吾人の苦痛を去り、吾人に歡樂を與へんとするものゝ一なり。而して宗教は內心の不安を除きて、心源より大安に住せしめんとするものなり。其何れか本、何れか末、固より智者に待たざるべきなり。然るに之を顚倒して、冠を履にし、履を冠にせんとす。是れ卽ち虻蜂雨失するものにあらずや。政治も本領を全うせず、宗教も其大益を施さゝる、豈に當然ならずや。

彼の宗教を以て不開時代の遺物、開明世界の厄介物なりと云ふが如きに至りては、是れ全く宗教の何物たるを解せざるのみならず、猥りに妄想を逞うして、社會の事物を攪亂せんとするもの、其言甚だ有害なるが如しと雖も、此の如

き妄言は、今日些の眼識あるものの傾耳する處にあらざれば、別に排擊を要せざるべし。

畢竟するに、宗教は社會の大必須不可缺の要法なり。而して其效用は夫れ于將莫耶の劍の如し。之を活用する亦名手を要す。若し夫れ不明の沃兒をして之を弄せしめんか、毫も成效なきのみならず、或は社會的の大傷を起さん。有眼の士、豈に注意せざる可けんや。

宗教の目的此の如くにして、其必要亦此の如し。此より其要素を討尋せんとするに、亦其目的、拔苦與樂の考究より始めん。

抑、苦樂は原本の感情にして、解釋し得べきにあらずと雖も、今其由て生ずる狀態を尋ぬるに、苦痛の生ずるは、內心と外境と適合せざる場合にあり。歡樂の起るは、內心と外境と能く適合する時機に限る。故に吾人の生活が、有限なる範圍內に止まる間は、到底安心立命の大樂ある能はざるなり。何んとなれば、諸行は無常、有限の境界は其大なるとを問はず、早晚遂に變動を免れざるが故に、一種の境遇に對して精神を適合するも、其もの變じ去れば、歡樂亦隨て消散せざるを得ざるなり。之を例するに、茲に一珠玉を得て、之を愛重する、其歡樂甚だ多なりと雖も、一朝破壞の不幸に遭遇せんか、歡樂忽ち消散して、却て愛惜の苦痛を止むるに至る。又假令破壞の不幸なきも、他に更に一層珍美なる寶珠あらんか、愛玉者の情として、必ず之を厭ひ、彼を欲するの苦痛に迫られん。是れ僅に一例のみ。而して吾人の現前に來往する境遇、皆全く此類なり。此中焉ぞ安心立命の大樂あらん。故に安心立命の大樂を欲するものは、有限の範圍を去りて、無限の境遇を求め、之に對して精神の適合を求めざる可からざるなり。果して一たび無限の境遇に對して安心せんか、此境遇は永久不變にして、涅槃寂靜嘗て動轉の煩累なきが故に、其歡樂も亦永續不變にして、如何なる苦境の來投することあるも、能く之に對して精神の安泰を全うせしむるに至る。所謂拔苦與樂の眞相、是に於てか瞭然たるを得べし。

二。無限

安心立命は無限の境遇に對して精神を適合するにあること、略、明なりとせん。次に、其無限の境遇とは、如何のものなりやを尋ねざる可らず。空間上に無限なるものか、時間上に無限なるものか、將又性質上(德性上)に無限なるものか。曰く、無限の屬性に於て無限なるものなり。(スピノザ氏の天帝に似たるものか。)時間を問はず、空間を問はず、德性を問はず、凡そ吾人精神作用の境遇となるべき一切の點に於て無限なるもの、之を略稱して無限の境遇(或は單に無限)と云ひたるなり。然り而して、今哲學上の通常なる最大範疇に就て之を云はゞ、主觀的に無限にして亦客觀的に無限なるものなり。更に宗教的に之を名くれば、自利的に無限にして、亦利他的に無限なるものなり。之を略して智慧に於ても無限にして、慈悲に於ても無限なるものなりと云ふ。而して諸他の德性を包括するの意を示さんとせば、之を稱して尊體と云ふ可し。故に宗教上精神の對境となるべきもの、之を稱して悲智圓滿の尊體と云ふ。阿彌陀佛とは之に對する梵語なり。(阿彌陀佛とは無量壽光覺者と云ふ意なり。無量壽とは、慈悲圓滿の表號にして、無量光とは智慧圓滿の表號なり。又佛とは最尊の稱號なり)。

宗教上精神の對境となるべきものは、萬德圓滿の無限尊體なること、略、明なりとするも、此の如き尊體は、果して現實に存在するものなりや、將又單に觀念上の理想に止るものなりやと云ふに、固より現實に存在するものならざる可からず。而して之が證明を爲すの理論は、彼の有名なるデカルト氏所立の三證中、特に實在學上の證明に於て、今日に至るまで、未だ一の完全なる駁說あることなし。取て以て前問の答辯と爲すに足る。(今之を略す。『骸骨講義』第三章を見るべし)而して更に次に簡明なる一說を擧て以て補充とす。(有限あれば無限なかる可からず云云)(『宗教哲學骸骨』第一章「有限無限」の項、參照す可し)

三。有限無限

有限あれば無限なかる可からず、無限あれば有限なかる可からざるは、猶ほ相對あれば絕對なかる可からず、絕對あれば相對なかる可からず、又差別あれば平等なかる可からず、平等あれば差別なかる可からざるが如し。其他依立、

自立、部分、全體、等に就て見るも、亦然り。共に、甲あれば非甲なかる可からず、非甲あれば、甲なかるべからざる論理に由つて成立す。夫れ此の如く、有限無限の存在は、甲、非甲の論理に據るものなりと雖も、通常所謂、甲、非甲の式に循ふものと同等にあらざるを知る可し。何んとなれば、通常の所謂、甲、非甲の式に循ふものは、甲、非甲相寄て一全體を成し、甲は其一半、非甲は其他半を成すものなれども、今有限無限は之に異り。即ち無限は其のみにて全體をなし、有限は其部分を成すに過ぎざるなり。他語以て之を云へば、通常の甲、非甲は二者同等の資格を有すと雖も、有限無限の場合にありては、無限は有限と其資格を異にするを見る。即ち無限は有限の上位に在るものなり。

圖に就て解釋すれば、色非色、或は心非心の如き、同格の場合にありては、二者相依て萬有の全體を成し、而して色或は心は其一半、非色或は非心は其他半を成すものなり。然るに今之を有限無限に合せんか、色も有限、非色も有限なり、心も有限、非心も有限なり、色非色合して無限、心非心合して無限と云ふべき也。

四。根本の撞着

無限存在の證明は、前段に於て略、明なり。又有限無限の關係は、通常の甲、非甲の關係に異なるとも、亦略、判然たり。而して更に有限無限の關係を瞭然たらしめんとするに、有限と無限とは、其體同一なること、並に有限は無數なることを指摘せざるべからず。抑、無限は其外に一物の存するを許さゝるものなり。何んとなれば、若し夫れ一物ありとせんか、其物は無限と別異なるが爲には、無限と限界せられざるを得ず。即ち謂ふ所の一物と無限と限界あるは、是れ無限に限界ありとするものにして、無限を有限となすものなり。是れ無限の意義に背反するものなり。故に、若し無限の意義をして正當ならしめんとせば、有限は無限の外にあるにあらずとせざるを得ず。無限の外になしとす

れば、其體無限と同一なりとせざるを得ざるなり。然り而して、一箇の有限は無限と同一なる能はず、千萬の有限も無限と同一なる能はず。無數の有限ありて始めて無限と同一なりとするを得るが故に、無限其物の存在する以上は、有限は無數に存在すと爲さゞるを得ざるなり。

無限有限同一體にして、無數の有限實存すとせんか、茲に更に幾多の問題の考究すべきあり。而して其第一着に現前するは、根本の撞着なり。何をか根本の撞着と云ふ。多一の撞着、可分不可分の撞着、等是なり。先づ多一の撞着とは、一は多にあらず、多は一にあらず。而して一は多ならざるを得ず、多は一ならざるを得ず。卽ち有限は多數なり、無限は唯一なり。而して有限無限同一なりと云ふ。是れ一卽多、多卽一なりと云ふものにあらずや。次に、可分不可分の撞着とは、可分は不可分にあらず、不可分は可分にあらず。而して可分は不可分、不可分は可分ならざるを得ず。何を以ての故に、有限は可分なり、無限は不可分なるが故に。是れ亦前同樣の撞着なり。否啻に是等のみに止まらざるなり、有限無限は同一體なりと云ふが、抑、根本の撞着なり。絕對相對、自立依立に就て云ふも亦然り。

之を要するに、有限無限の對立に於ては、根本の撞着存在するものなることを明知せざる可からざるなり。（カント氏の悟性の背律と云へる、ヘーゲル氏の實在は非在なりと云へる、皆此根本の撞着に外ならざるなり。）

五、有限の外に無限あり

先には、無限の外に有限有る能はずして、有限無限は其體同一なりと論定せり。然るに、根本の撞着あるが爲に、有限の外に無限ありの新論定を生ずるを見るべし。卽ち有限無限其體別異なりとの背說を成立するに至るなり。其論理は次の如し。先には、無限を基想として立論したるに、無限は限界を許さゞるが故に、其外に有限ありて、無限と限別すと云ふ能はざりしなり。然るに、今轉じて、有限を基想とせば如何。有限は其體限別あるものにして、限別の存せざる無限と同體たる能はざるなり。故に無限なるもの存すとせんか、其體は有限の外に在りと爲さゞるべからざるなり。是れ全く先の同體論に背反

すと雖も、其が爲め二者を輕重偏癈すべからざるなり。全く根本の撞着より隨起せる一段(從屬)の撞着たるに過ぎざるなり。蓋し、有限と無限と其觀念に於て撞着を含藏するが故に、先に無限を基想として論定したるものは、一種の斷案となり、今有限を基想として論定したるものは、又一種の別斷案たるものなり。故に無限有限其體同一たると同時に、有限の外に無限の存在することを知らざる可からざるなり。

『維摩註』(三)肇曰彼岸、涅槃、岸也、彼涅槃豈崖岸之有、以我異於彼、故借我謂之耳」と。有限の外に無限ありと云ふの意、亦以て推すべし。

六。自他力二門

前段論じ來るが如く、有限無限の二者に就て、其體同一なると、其體別異なるとの反說存するが故に、茲に宗敎に於て、自力門他力門の二者を生起するに至るなり。是に於て、亦哲學と宗敎との區別を辨知すべきなり。哲學は此の如き反說の兩立を許さゞるなり。故に二者を討究して、終に契合せしめんとし、其論辨停(休)止する所なし。然るに、宗敎は其內に就て、或は一を採り、或は他を採りて、之を信仰するが故に、茲に始めて實踐の基趾を得るに至る。而して有限無限其體一なりと信ずるものは、現前有限の吾人にも、其內部に無限の性能ありとなすが故に、自力を奮勵して此潛的無限能を開展せんとす。是れ自力門の宗敎なり。然るに、有限の外に無限ありと信ずるものは、在外の無限に無限の妙用を認むるが故に、此無限の妙用に歸順して、其光澤に投浴せんとす。是れ他力門の宗敎なり。二門の性質容易に說明し難しと雖も、其基想より轉起するの源流は、略、此の如し。

七。有限は無我なり

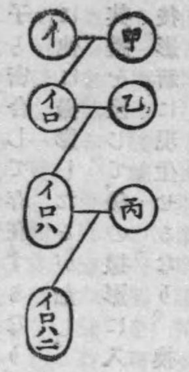
宗敎中の最高なりと稱せらるゝ佛敎の原理に、諸法無我の眞理あり。是れ有限の成立に對する根本の誤謬を排擊するものにして、或は常耳を驚かすとなきにあらず。今其至理を略論すべし。抑、有限は其存在に限界なかるべからざるが故に變易にして、無限は其存在に限界ある可らざるが故に不變易な

り。(若し有限にして不變常住なりとせんか、是れ其存在に限界なしとするものなり、豈に矛盾の說ならずや。又若し無限にして無常變易なりとせんか、是れ其存在に限界ありとするものなり、豈に亦矛盾の說ならずや。故に無限は常住不變にして、有限は無常變易なりとせざる可からざるなり。)然るに、通途の所謂我なるものは、常住不變の一體を指すものなり。此の如きものは、是れ有限中に存在すべからざるものなり。今夫れ佛敎の所謂諸法とは、所有の有限を云ふものなり。此等有限の中には、常住不變なるものあるべからざるが故に、諸法無我なりと言はざる可からざるなり。果して然らば、彼の所謂造業感果(善惡業感)の事、如何にして說明し得らるゝや。若し因果應報の間に、一體の繼續して造受の行を作すものなしとせば、彼の所謂業報なるもの、誰か之を造り、誰か之を受くるや。若し因果感報其事確立せずんば、修因感果の佛道、豈に全く破滅せざらんや。是れ須らく考究すべきの問題なり。請ふ因緣所生の道理を略解せん。

八。因緣所生

(二月七日)

因緣所生は有限界の最大原理にして、其高妙深遠なること容易に說き難しと雖も、今其主要の點を概說せば、凡そ有限界內の事象は、皆悉く變易(無常)の法にして、一も常住なるものあることなし。(無我)而して其變易するや、常に因と緣との二元素ありて、果報を生ずるものなり。圖すれば左の如し。



乃ち㋑なる因あり、㊀なる緣ありて、茲に(イロ)なる果を結び、又(イロ)なる因あり、㋺なる緣ありて、茲に(イロハ)なる果を結び、又(イロハ)なる因あり、㊂なる緣ありて、茲に(イロハニ)なる果を結ぶ。此の如く因緣重連して、永く因果相感の變易を繼續するものなり。而して茲に最も注意すべきは、緣なる元素にして、是れ卽ち因をして果に轉せしむるの主動者なり。若し夫れ緣にして誤る處あらんか、忽ち果報の上に其影響を及ぼして、或は全く因力を破壞するが如き結果を生ずるに至るなり。

緣豈に重要の元素にあらずや。次に更に大に注意せざる可からざるは、因果の成立なり。因は㋑にして、果は㋺となり、因は㋺にして、果は㋺ハなりと見れば、因は全く果中に包存せらるゝものゝ如し。固より然るなり。然れども、其此く包存せらるゝや、前の因位にありし其儘にあるにあらず、一種の他分子と密合して存在するなり。之を喩ふるに、一面の撮影を他物中に列して、更に他に撮影したるが如し。前の影像固より其中に存在すと雖も、前の本影が其體を沒して、後の撮影に入りたるものにあらず。前影は別に存して而して後影新に現生せるなり。換言せば、後影は前影を感傳したるものなり。念々無常の變易界中、前後一貫の脉絡通ずる處あるは、蓋し此の感傳作用によるものなり。心識に統一作用の存する、亦此に外ならざるなり。自覺の一致が前後の心狀を貫通統轄する所以は、夫れ此に依るものなり。

九。自覺の一致

（二月八日）

先に因緣所生を論ずるに當て、自覺の一致に說及せり。是れ甚だ重要の事項にして、而も一大好問題の存する所なり。蓋し自覺の一致は所謂心靈の特點にして、此に依て一體の心靈が能く其三世に亘りて、一線貫通、以て因果感應の妙用を遂成する所の根基なりとす。若し夫れ自覺の一致にして缺損する所あらんか、萬用萬化の因果統一は悉く其據を失して、亂起亂滅得て捕捉す可からざるに至る。彼の夢中の象化の如き、正に是なり。夢中の象化は、覺時の象化と等しく、其現像明瞭精細、毫も眞妄を其間に發見する能はざるが如しと雖も、一度前後統一の有無を考ふるに至れば、忽ち二者雲泥も啻ならざるの間隔あるを見る。是れ他の故あるにあらず。一方には自覺の一致作用整然として前後を一貫し、其象化をして秩然せる因果的序次あらしむるに反して、他方には此の一致作用の缺失せるが爲に、前後の象化、突現忽沒、厖々紛亂して、更に順階の追ふべきなきを知る。夢覺の間に於て、夫れ斯の如し。然れども、夢象は未だ以て全く一致を缺ぐものにあらず。其亂紛厖々中、尙多少の統序を見難きにあらざるなり。是れ他なし、夢象は實に覺象の反照たればなり。若し夫れ純然たる厖象にして、全く自覺の一致を缺くものに至りては、其擾々紛

亂の狀態、更に幾層の甚しきあらん。今之を喩說するの道なきのみ。(夫れ或は荒天の雲影を以て其一端に比するを得んか。)之を要するに、自覺の一致は、心靈の根基作用にして、吾人が因果秩序を認知するの源泉たるもの、其關係最も大なるものと知るべきなり。(『宗教哲學骸骨』參照)

夫れ然り、自覺の一致の重要なること斯の如し。而して此作用が如何に有限體に存在することを得るか、是れ亦精しく考究せざる可らざる所なり。抑、有限は無常にして、其擧體轉變を免れざるなり。其間永く前後を一貫して、三世因果(三世には一期の三世あり、刹那の三世あり、別に考究すべし)を包有せしむるものあるとなし。如何にして自覺の一致あるを得るや。蓋し其作用は永久のものにあらずして、唯若干時の期限に統一を施すに過ぎざるや。吾人の生命は遠く無始の昔よりして、今日今時に連亘せるものにあらざるや。今日今時より其修因を積集して、無終の未來に至るまで、其效果を受用すること能はざるや。果して然りとせば、吾人の世界觀上大に考覈せざる可らざるもの、暴湧せん。吾人の生命は幾何時を期限とするや。吾人自覺の一致作用は、何時に始まりて、何時に終る者なりや。其起るは何故なりや。其滅するは何故なりや。此等の根本問題よりして、波及する所の實踐的問題は、其數容易に得て盡す可からざらんとす。而して其結歸する處、吾人の生存をして、茫々漠々、眞妄不明、邪正渾沌の迷海に漂泊せしむるにあり。是れ豈に至理の許す所ならんや。若し夫れ此迷悶を一掃して、滿空開豁の快園に遊ばんとせば、有限窟中自覺一致の潛伏せる幽奧を發展せざる可からざるなり。請ふ試に一鑿せん。

有限變轉の狀態は、因緣所生の圖に於て明なり。因果展轉の間、一も永久不滅の體質あるとなし。而して前狀態の現象の、後狀態に傳はる所以は、全く感傳作用にありと云へり。此感傳作用は、蓋し是れ自覺一致の潛伏するの導火線なり。其樣如何。曰く、須く感傳作用の由て生ずる根源を尋ぬ可し。若し有限、全く個々別々の體質たらんか、決して此感傳作用ある能はざるなり。之を通傳動感すべきものなければなり。而して既に感傳の事實あり、是れ如何か解すべき。蓋し其本源に反りて、抑、有限の眞體本相は、純乎たる有限個別のものにあらず、其實の體性全く無限なることを熟察すべし。體性既に無限な

らんか、作用上に其反照の顯現すること、當に然るべき所なり。乃ち彼此我他の有限は、一見個々別々のものゝ如しと雖も、其內實同一體の無限にして、彼の作用は此作用に相應し、我の動靜は他の動靜と相感ずること、豈に何の怪む可きあらんや。彼の自覺の一致こそ、最も此同一本源相當の作用たれ。個々殊別の動作は、却て同一無限の體性に反するものたるなり。雙手五指其活動相應合して整備する所以は、他なし、唯一心の指命に出づればなり。彼手、此手、彼指、此指の間にありては、夫れ感傳應動と云ふべきのみ。

一〇。開發（活動）（二月九日）

前節自覺の一致を說明するに當りて、有限は純乎たる有限にあらずして、其實全く無限と同一體なることを云へり。是れ更に新義を開展するの端緒たるものなり。若し有限にして全く無限と同一體たらば、無限も亦全く有限と同一體たらざる可からざるなり。（是れ先に既に一言せる所なり。）故に有限無限は、共に各表裏二面を具するものたるなり。然れども、表裏の言たる唯一比言に過ぎず。若し其實際を觀察せんとせば、甚だ領解し難きを見ん。是に於てか、一の最重要なる事項の熟知せざる可からざるものあり。何ぞや、曰く、萬有開發（活動）の事是なり。抑、宇內萬有は、皆各開發活動の事象にして、一も靜止停息するものあることなしとは、世上一種の命題たり。是れ實に萬化の普徧なるを看破したるの言にして、甚だ重要の考說なり。然るに此の如き活動萬化は、抑、如何のものたるや。今其本源に就て之を論ずれば、蓋し是れ有限無限の一體表裏の關係を明示するものに外ならざるなり。夫れ有限無限は一體表裏のものなりと雖も、若し開發活動の事實の之を表明するなかりせば、其關係容易に領解す可からざるなり。又若し有限無限の一體表裏の關係存在せずば、萬有開發の事實其論據を得る所なきなり。蓋し二者は、相寄て宇內の實相を吾人に覺知せしむる者たるなり。今其概略を述べん。有限は吾人其有限たるを知るも、其無限たるを知る能はず。無限は吾人其の無限を考ふるも、其有限たるを考ふる能はざるなり。（是れ表裏と云ふも比言に過ぎずと云ふ所以なり。）唯彼の論理の必然によりて、有限無限同體表裏の根本的撞着を

認むるに至るのみ。然るに、茲に實際の事實なる者あり、鷄の卵を產し、卵の鷄を生ずるを示す。卵の卵たるを知るに止まりたるもの、其亦鷄を生じ得るを知り、鷄の鷄たるを考ふるに止まりたるもの、其亦卵を產み得るを考ふるを得。而して是れ有限界內の事に過ぎずと雖も、既に一定形の觀念を破りて、形體開展の事跡を認了せしむるに足る。是より萬有を點檢すれば、宇內の萬象一として變轉動化の者にあらざるなきを領解し、更に進んで變轉の本、動化の源を尋ぬるの止むを得ざるに至る。果して變轉の本、動化の源を推探せんか、有限の變轉動化は、進んで無限の開展變化の思念に入らしむるあり。而して無限の開展轉化は他にあらず、有限の無限に進み、無限の有限に化するの二者に外ならざるなり。有限果して無限に進み得るか、其體純乎たる有限にあらずして、亦無限たるなり。(卵の隱然として鷄たるが如し。)無限果して有限に化し得るか、其體純乎たる無限にあらずして、亦有限たるなり。(鷄の卵を懷くが如し。)是に於てか、單に理論上の事項、茲に實際上の證象を得て、其成說寔に明確なるを得るなり。而して彼の實際の象化は、此理論の說明に合して、其成立益、精瞭なるを得るに至るなり。果して上論する所の如くならんか、吾人は有限無限に對して、茲に開發展化を宣言せざる能はざるなり。曰く、有限は寂然たる有限にあらずして、變化活動の體なり。其開展の極は、無限に進達するにあり。曰く、無限は湛然たる無限にあらずして、展轉變化の體なり。其發動するや、現じて有限の萬象に表はるゝありと。(佛敎には流轉門・還滅門と云ふ。)請ふ、其論據を詳言せん。(以下補訂の論を加ふ。)

一一。補訂

(二月十日)

先に有限無限は同一體にして、有限を表とするものは、裏に無限性を具へ、無限を表とするものは、裏面に有限性を具へて、有限無限は一體表裏のものなることを說けり。然るに、此說尙未だ盡せりと云ふ可からざるなり。何となれば、是れ唯靜的の說明に止まりて、其動的說明に達する能はざればなり。其樣如何。曰く、是れ有限を表とし、無限を裏とする一靜體あり、無限を表とし、有限を裏とする一靜體あり、卽ち二個の靜的別體ありとするものゝ如き觀に止ま

るなり。今之を圖解せば左の如し。

有限〔無限　無限〔有限

是れ固より眞正の解にあらずと雖も、唯如上の說明にて止まらば、夫れ或は此の如きに解了せらるゝあらん。若し夫れ然りとせんか、同一體の言不適切なりと云はざる可からず。何んとなれば、圖の如きは、全く二個の別體なりと云ひ得らるればなり。之を强て同一體と斷言するは、蓋し不當と云はざる可からざるべし。然りと雖も、彼の同一體の言は、此の如き意義にあらずして、眞乎に二者同一體なりと云ふものなり。決して其均等に不足あることを認めざるものなり。故に今之を圖解せば、左の如くならざる可からず。

有限（無限　無限（有限

是れ別に前圖解と大差なきが如しと雖も、決して然らざるなり。見よ、此圖解の如くならば、上者と下者とは、全然同一物にして、二物にあらざることを。即ち上者を其儘に一轉すれば下者となり、下者を其儘に一轉すれば上者となるなり。即ち唯一個の物體を取り、先づ之を圖して上者を得るとせんか、別體を求めず、唯之を一轉して圖すれば、下者を得るにあらずや。之れを前圖に求むるに決して能はざるなり。「有限〔無限」を一轉すれば「無限〔有限」を得るのみ、「無限〔有限」を得る能はざるなり。「無限〔有限」を轉ずる亦然り。「有限〔無限」を得るのみ「有限〔無限」を得る能はざるなり。

二之を換言して論ずるに、前圖は未だ轉化の事項を要とせざるものなり。（轉ずるも益なきなり。）然るに後圖に至りては、轉化を以て寧ろ其大要義と爲すものなり。（轉ずると轉せざるとによりて、有限無限の大差を呈すればなり。）即ち有限は無限と同一體なり。而して今や有限を表とし、無限を裏とす、必ず轉じて無限を表とし、有限を裏とすることなかるべからず。又若し今無限を表とし、有限を裏とするものは、轉じて有限を表とし、無限を裏とすることなかるべからざるなり。果して然らば、有限無限眞に同一體たらんか、轉化は其必然的發動なりと云はざるべからざるを知るべし。是れ即ち、有限無限同一體の動的說明を成辨するものにして、即ち前の靜的說明を扶翼して、其眞意を開闡するものなり。而して吾人の活動云爲は勿論、宇內萬多の象化は、皆悉く彼の

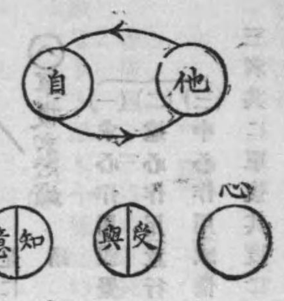
轉化の成分に過ぎざることを思へば、轉化の重大なること、實に言語の及び難き所あるを推知すべし。請ふ、次下少しく之を考究せん。（次に心靈開發に先ち心靈を論ず。）

一二。心靈

（二月十五日）

心靈とは吾人各自の如きものなり。言辭を以て說明せんより、各自の內觀實際を催すを適切なりとす。今は唯由て以て觀察すべき緣緒を提示せんのみ。抑、吾人は彼此他我の關係中に繫在して、常に外物と對關するものなり。是に於て二條の考ふべき路あり。一は、彼他より、此我に對して爲す所の作動、二は、此我より、彼他に對して爲す所の動作なり。

第一を感動或は感覺と云ひ、第二を發動或は行動と云ふ。此に依て心靈に二面の體裝を認め得べし。一は受動的にして、一は與動的なり。或は能動的所動的と云ふも可なり。心理學者は智的意的とも云ふ可し。而して智意の二用に通じて、心靈の最も著しき特性あり。今其大本に就て之を云はゞ、苦樂の二者なり。是れ常に彼の智意の發作に隨起するものにして、其外見的說明は、彼の智意二作用發現の狀態に就て云ふの外なきなり。卽ち二用にして、外物に對する關係其適合を得れば、茲に快樂の情を感じ、之に反して、二者の外物に對する關係其適合を得ざれば、茲に苦痛の情を感ずるものなりとす。（外刺に對する心力の分量によりて、苦樂を判定せんとするは、未だ盡さゞるものなり。心力は外刺の分量のみならず、其性質によりても快苦を異にするなり。又單に外刺と云ふも不可なり。智のみにあらず、意にも亦快苦の伴ふあればなり。今は假りに內外二者の對立、或は關係に於て、適合不適合と云へり。）



一三。智情意

（二月十六日）

前段に於て、心靈の特能は智情意三作用なることを說けり。今假りに、近世解剖上の成績を以て之を比解すれば、夫れ神經には求心性と遠心性との別あ

るは、脊髓前後根の考究に就て顯然たるが如し。而して神經には纖維と細胞の二者あり。何れも單行複重容易に得て究了し難しと雖も、畢竟するに左圖の如く畧揭するを得可き也。蓋し、細胞は纖維の行走間、何處にも充散し、又細胞相寄りて中心團を爲すの所にありても、纖維は其間に充塡して、彼此の關絡を爲すと雖も、要するに、纖維は內向(求心)的、或は外向(遠心)的に傳道作用を爲し、細胞は其本末何れの箇處に存するも、共に中心的の官能を爲すものたりとす。

是に於てか、神經組織に三大本元作用あることを見る。所謂

(一)求心作用(感覺作用)
(二)遠心作用(意行作用)
(三)中心作用(感情作用)

三者共に單複其度に於ては千差萬別なりと雖も、之を要するに、第一類は所謂智力作用にして、第二類は、所謂意志作用、而して第三類は、所謂情緒作用なるものなり。

一四。三用の階級

智情意の三用に、單純複雜の度に應じて、各階級等差あり。而して其等級無數なりと雖も、今通途の智力の四段に就て、圖示すれば左の如し。

通途には、情意に等級を精說せざれども、今論理上の關係を明瞭ならしめんが爲に、悉く之を配示せり。又智と意の差別は、智意と情との區別に異なるが故に、異樣に圖したるものと知るべし。固より心體は唯一にして、心用亦一條

なるは勿論なれども、其中自ら三用の別あり。之を例するに、茲に一心用ありとせんに、智の方面には之を感覺とせば、情の方面には感情にして、意の方面には感情たるべきなり。其他類推すべし。

一五。心靈開發　（二月十八日）

心靈には、皆各、前節所表の如き階級を具へたりや、或は其階級に於て種々の不同ありやと云ふに、心理學の研究する所によるに、蓋し後者なること疑ふ可からざるなり。果して然らば、如何にして此の如き不同ありや。他なし、其開發の度に種々の差等あればなり。

抑、心靈の開發は、之を略言せば、彼の智情意の作用が、前段圖示せる階級に於て、下等より漸次上等に進行するにあるなり。少しく其模樣を解釋せば、所謂下等の作用は、個々別々の能動及所動にして、其諸用は彼此の關係甚だ疎漫なるのみならず、時々大に爭鬪或は背反するが如きを見る。然れども、進んで上等の作用となれば、彼此の動作が互に相關係聯絡して、容易に分離隔別し難きのみならず、先に爭鬪背反するが如く見へたる作用が、全く其性質を同じくして、畢竟同本の異枝たることを證明するに至る。（一例を擧げんか、煙の上ると雨の下るは、別々の作用にして、其性質全く反對のものなりとす。是れ一段の認識なり。然れども、學理の指導によりて、其源奥を考究すれば、何ぞ圖らん、彼も此も共に物質の引排作用の現象に過ぎざるを知る。唯、一は他と其比重を異にするが爲に、上となり、下となるの表相を呈するに過ぎざるのみ。）

夫れ此の如く、心靈の開展は個々隔離の物象を統制して、同一の本源に歸入せしむるなり。而して本源より本源に溯りて、其極は最上究竟の本源に到達せしむ。是れ所謂大覺也。然り而して、此の如き開展の段次に於ては、啻に層々高遠の本源に達するのみならず、蘊て亦諸多枝條の脉絡聯關を闡明して、各個の事象に幾多勝前の價値を有せしむるに至る。（前例に就て之を云はんに、煙の昇る、雨の降るには、各、若干の價値ありしなり。然るに、茲に之を統轄して

物質牽排の本源に歸入せんか、一段高遠の新思想に二者を聯絡せしむるのみならず、彼の煙昇雨降の現象をして、從來曾て無かりし價重を有せしむるあり。何れとなれば、煙昇の一現象は、前には唯其自己一現象のみの價重に止まりしに、今や牽排作用の價重を、其自身に荷負するのみならず、彼の全然正反對の敵象と認め居たる降雨の現象迄を收羅し來りて、自家同屬の兄弟的現象とし、其價重を合せて自家の價重に加ふるに至る。恰も敵人の眞相を對尋し來るに、全く肉親の兄弟にして、曾て我障害と思ひ居たる勢力は、今や轉じて我を庇保するの援勢助力となれるが如し。更に雨降の現象より見るも、亦同轍なり。此例を推して考究すれば、宇内萬多の勢力、今や我に敵する仇讐の如くなるもの、亦皆悉く我を益するの從僕たるを認知するに至るべき事、豫め推知すべし。）『骸骨』「主伴互具」參照）（百毒の長たる酒精も、其眞相を究めて利用すれば、百藥の長となり、貪瞋癡の煩惱も、之を活用すれば、衆生濟度の利器となる。『圓覺經』に「淫怒癡是菩提」と云ひ、『維摩經』には「若至博奕戲處、輙以度人」と云ひ、「入諸婬舍、示欲之過」と云ひ、「入諸酒肆、能立其志」と云ふが如き、皆以て脫落し來れば、百千の煩惱惡業、亦毫も怖畏すべきにあらず。活轉一番、以て修道の資とするに足るとを說明して餘あるを見る。若し夫れ大覺達了して、以て萬有を統制し去るに至れば、殺活自在の大位量を有して、八萬四千の煩惱を縱橫無盡に運活し了するに至らば、豈に何の苦惱か是れ有らんや。）

無明の無體なること、此邊に於ても略、推想すべし。

一六。萬有心靈

宇内の萬有は、彼此相關係聯絡して存在せざる可からず（關係聯絡なきものは、吾人其存在を知る能はず。此の如きものは、よし之あるも、吾人の知識以外、卽ち吾人の認識する萬有以外のものなれば、論議の限圍に絕したるものなるが故に、吾人の所謂萬有は、皆悉く彼此相關絡したるものたらざる可からず。）とせば、萬有は皆各、能所の動作を備へたるものなり。而して能所動作の存する、既に智的意的の二作用とせば、第三の情的作用も亦萬有各個に存在せざる可からざるべし。何んとなれば、彼の能所作動には皆亦適合、或は不適合の場

合あるべければなり。既に萬有各、に智的意的情的の三作用ありとせんか、萬有は悉く心靈的のものなりと云はざる可からず。而して其間に萬多の不同あるは、他なし。萬有各、其進化の程度に於て、差等あるに由るものなりと云はざる可からず。然らば、瓦石は熟睡せる心靈なり、草木は半睡の心靈なり、人間は半覺の心靈なり、神佛は大覺せる心靈なりと云ふと、豈に方外の言ならんや。

智あり、意あり、情ありと云ふにあらず。智的作動あり、意的作動あり、情的作動ありと云ふのみなり。請ふ熟了せよ。

一七。無限無數

（二月十九日）

萬有は心靈にして、皆各、開發性のものにして、其開發の極は無限に達するにあれば、無限の存するや、無數にあり得べしとせざる可からず。將來に固より無數なるべきは勿論、既往に多數あること亦疑ふべきにあらず。是れ多神教の根基なり。蓋し古來宗教上に一神教、多神教あり。其所論各、確然たる原理ありと雖も、當時動もすれば、一神教のみを合理の宗教とし、多神教の如きは、或は蒙昧時代の謬教たるが如く看過するものなきにあらざるが如しと雖も、是れ甚だ謂れなきことなり。其根基を尋ぬれば、多神教も亦確に一種の原理を包含するものなり。中に就て、今此無限無數の原理は、其最も重要なるものなり。八百萬神と云ふも、十方諸佛と云ふが如きも、亦此原理の表白に過ぎざるなり。然り而して、無數の無限が、如何にして並存し得るやに至りては、或は難解の點なきにあらざるが如しと雖も、今之を簡言せば、抑、萬有の眞理は、其體無限のものなり。之を開悟覺了せるものは、各、皆無限たるなり。之を比況するに、彼の天上の月に對する明鏡は、其數幾何あるも、皆各、一月を得るが如し。萬有の眞理其物一なりと雖も、之を覺了する所の能者は、無量無數不可計なること、毫も通じ難き所にあらざるなり。（更に他例は『骸骨』『無限無數』の項、參照すべし。四千萬頭皆各、我大日本帝國と稱す、而して毫も互に妨害なきなり。）

一八。無神論有神論

古來、無神論、有神論の爭辯ありと雖も、是れ共に宗教原理の一半を解して止

みたるの論說。今此紛擾を一掃するに、彼の無神論は有限あるを知りて、無限あるを認めざるものなり。故に其辯や固より一理なきにあらず。有限は寔に瞭々たる存在にして、萬有悉く一面より見れば、皆有限たればなり。次に、有神論は、無限あるを認めたるも、未だ有限に開發あるを知らざるものなり。故に單純なる有神論は、神を以て全く吾人と別類のものとし、吾人の亦彼の神と同體たり得ることを肯んせざるなり。然れども、無限の存在は確に萬有の眞相なれば、其理論の堅牢なること、決して拔くべからざるものありて存するなり。然れども、以上の二論は、未だ以て充分の敎基たる能はざるものなり。故に見るべし、無神論者も亦安んせざる所あり、有神論者も未だ滿足せざる所ありたることを。

一九。一神論多神論

一神論、多神論は、其幾何かの基礎を有する論說なり。卽ち先に云ふが如く、無限にして無數あり得る以上は、多神論の原基あること勿論なり。而して一神論の妙趣何れにありやと云ふに、彼の無數の無限は、畢竟其實唯一無限なるが故に、一神論の原基あること亦勿論なり。其樣如何と云ふに、彼の無數の無限は、彼此相互に平等均等にして、毫も差異あることなきものなり。佛語にて、「佛々平等」と云ふ、「十方三世の無量慧、同じく一如に乘ず」と云ふ是なり。尙彼の萬鏡に映ずれども、其實一月たるが如し。

二〇。凡神論萬有開展論

有限無限の關係に對する萬有の實相を、最も能く說明する所の舊說は、凡神論にあるが如し。卽ち個々の萬有を以て、皆各、神なり（卽ち無限なり）と說くは、是れ正に無限無數の眞理を說破し得たるものと云はざる可からざるなり。是れ凡神論が、或は一神論たるが如く、或は多神論たるが如く、或は又無神論にも彷彿たるが如き觀ある所以なり。然れども、凡神論にも尙缺漏なきにあらず。他にあらず。有限無限の關係に於て、無限無數の原理を表白すと雖も、未だ其如何にして、此の如きやの事情を指示せざるの嫌あり。卽ち萬多の有限

は、今表面に有限なるものも、開展てふ一事情によりて、無限に展變する者なり。又今表面に無限なるものも、亦轉化てふ一事情によりては、有限に顯現するものなり。凡神論は此重要なる開發轉化の事情を明瞭ならしめざるの憾あるなり。所謂靜的の表白に止まりて、未だ動的の指說に及ばざるものなり。若し此等の諸點を充分に表白せんとせば、(之を佛書の言句中に求めざる可からず。「草木國土悉皆成佛」と云ふが如き、「色卽是空、空卽是色」と云ふが如き、草木國土と云ひ、色と云ふは是れ有限なり。佛と云ひ、空と云ふは是れ無限なり。而して一方には皆成と揭げて、動的關係卽ち開展の事を明にし、一方には卽是を反復し、而も色と空との位置を轉換して、以て開展に二樣あるを示す。然れども、此等各、其宗義に於て、格別の解釋存するが故に、今吾人をして簡單に吾人の說を表白せしめば、萬有開展論と稱するを以て滿足せんとす。(而して其所說之を歐洲先哲の學說中に求めんか、ライブニッツ氏の原子論(モナドロギー)、ヘーゲル氏の論理系統(ロギーク)を以て最も近きものなりとす。)

二一。自利利他（上）

抑、萬有の動作は、能動所動の二者なること、既に之を說けり。今實際的に此等の動作を觀察すれば、自利利他の二用となる。卽ち先に言ふ所の所動(或は受動)は、是れ自利の用にして、能動(或は發動)は、是れ利他の用なり。是れ甚だ一概の說にして、忽ち問難を免がれざるべし。何んとなれば、能動の中にも、自利の用あるべく、所動の中にも利他の用あるべきに似たればなり。然れども、請ふ少しく解說せん。能動の作用は、必ずや他に到入せざる可からざるなり。而して到入するものは、必ずや他を利する所なかる可からざるなり。(若し利する所なきものは、忽ち排斥せられて到入すること能はざればなり。)故に能動の作用は、其能く能動の性能を成就する以上は、常に利他の用たらざる可からざるなり。轉じて所動の作用を推論するに、若し夫れ自己に不利なるものならんか、直に之を擯斥して、決して之を受用することなきなり。故に所動にして其性能を成就する以上は、必ず自己に利ある用たらざる可からざるなり。然れども、吾人は能動が利他にして、所動が自利なりと云ふのみ。(肯定命題を主張するのみなり。A)能動中自利なし、所動中利他なしと云ふには非るなり。

（否定命題を主張するにあらず。E）又能動中一分の自利あり、所動中一分の利他ありと云ふが如きも、今の所論にあらざるなり。（特關命題Iは今の所要にあらず、今は普關命題のAを要とするなり。）

此の如く、自利利他は、萬有の能所作動の實際上に於ける正當の用なり。然りと雖も、此正當の作用に混じて、亦自害害他の作用ありて、現實實際の人類の活動は、紛擾錯雜、容易に判然觀査し難きなり。（自害害他の作用とは、自の能動たるべきを、他の能動するは、害他の作用にして、自の所動たるべきを、他の所動とするは、自害の作用なり。此は事理を誤れる迷亂より起るものなり。人の所持すべきを、己に所持せんとし、我が果すべき義務を、人の責任とするが如き、以て推考すべし。）

萬有各個に能動所動の官能あり。有限の實際的に（卽ち所謂心靈上に）自利々他の作用あること、上說の如し。而して更に無限の上に就て之を求むるに、亦應當の德性あり。彼の神佛の智慧と云ふは、自利の德性なり。其慈悲と云ふは、利他の德性なり。（智悲の言は唯無限に局るべきにあらず。固より有限にも通じて用ゐらるゝなり。）

二二。自利利他（下）

萬有は、上說の如く自他相對し、彼我相關して立つものなり。故に心靈の實際的行爲に於ては、茲に自利と、利他と、自害と、害他との四類を生ず。而して自害害他の行爲は、是れ事理を誤れる迷亂より起るものなるが故に、正當なる行爲は、自利と利他との二種なりとす。今無限に就て之を云ふに、無限は開展覺了の體なれば、迷亂の存すべきなし。故に無限の行爲は、自利利他の外ある事なきなり。其自利の德性之を智慧と云ひ、利他の德性之を慈悲と云ふ。（此智慧、慈悲の二用は、前の智情に相當するものなり。）此二德性よりして、實際の行爲を生ず、之を方便と云ふ。（意に相當す）

二三。自利利他及方便の必然

心靈は皆悉く智情意の三用を具ふと雖も、自利・利他・方便の必然に至りては、

無限にあらざれば之を明認し難きなり。蓋し、有限は各、個別の觀に住して、動もすれば、他を以て讐仇にあらずとも、利害を異にするものと見做すを免れず。故に自害害他の弊を脱する能はざるなり。此狀態に於て、焉んぞ利他の德用あるを得んや。然るに無限(或は無限を知覺せるもの)に至りては、彼の個別の觀念は、是れ唯一面の表現にして、更に彼我平等一體の一面(寧ろ實相)あることを覺了するが故に、他の痛苦は卽ち之を自の痛苦と感じ、他の歡樂は卽ち之を自の歡樂と感ずるが故に、自利の全きが爲には利他の全きを要し、利他の成就は卽ち自利の成就と感知するが故に、其大智慧は忽ち大慈悲に轉じて、茲に攝化救濟の大方便を提起するに至る。是れ全く必然的の事項にして、決して然らざる能はざることなりとす。

智慧、方便の必然なること此の如しとせば、今實際上に在て、既に無限の存在を確信する以上は、必ずや其攝化救濟の事業を仰信せざる可らざるなり。若し之を仰信する能はざるものは、未だ眞個の無限に接せざるものなり。世の信者たるもの自ら省檢すべし。

二四。救濟の必要

前段に於て、救濟の必然を說明すと雖も、是れ無限の方に此の必然あることを示すに過ぎず。然るに有限の方に於て、果して其必要ありや、否や。若し夫れ不必要の事ならんか、彼救濟の大事業も、亦無限の自娛樂行に過ぎざらんとす、如何。曰く、勿論有限の方に必要ありて然るなり。抑、有限の無限に到達するは、其內性の無限力を開展するにありと云ふ。(所謂佛性を開顯するにありと云ふもの是なり。)然れども、彼の開展の事は、夫れ自然に現起し得るものなりや。(固より自然の解釋の模樣によれども、今は單に通途一應の意味にて、偶然無助緣にての義とすべし。)決して然る能はざる也。萬有の開展は、皆悉く因緣果の法軌(『骸骨』參照)に從はざる可からざるなり。而して結果の質量は、常に因緣の質量に順ずるものなり。果して然らば、今有限が開展して無限の結果を得んには、必ずや因緣の中に無限の元素を具へざる可からず。而して因素は則ち現在の有限なり。故に無限は必ず緣素に存せざるべからず。卽ち

有限の因をして、無限の果に達せしむるの緣は、其用無限たらざる可からざるなり。而して實際の悟道に於ては、或は有限の緣(飛花落葉)に由て得るやの形跡なきにあらざるが如しと雖も、是れ未だ緣の有限なることを證明する能はざるものなり。何んとなれば、此の如き場合の有限は、其實無限の表徵たるやも計られざればなり。是に於て、先づ所謂無限の方便を精究せざるべからず。今未だ方便を精究し了せざるも、因の無限開展には、無限の緣の必要なること、決して排すべからざる定理なり。若し假りに、有限の緣にて大悟し得るとするも、此の緣用は卽ち是れ因に對する救濟たること明なり。何んとなれば、此の如き緣なかつせば、因は永く有限の狀態を解脫する能はざればなり。

二五。自力他力

(二月二十日)

宗教に自力他力の二門あり。(第六節)而して其自力門に在りては、自己に無限の性能ありとなすが故に、自力の奮勵に依て大覺せんとするなり。是れ毫も他力を借らざる者なり。然るに前段の所陳は、一切の開悟に救濟を必要とすと云へるが如し。前後の所陳何れが是なりや。曰く、共に是なり。請ふ其然る所以を略述せん。先にも云へるが如く、有限の內に無限ありとすると、有限の外に無限ありとするは、背反相容れざる二說にして、其甲を取るものは、同時に又乙を取る能はず、其乙を取るものは同時に甲を取る能はざるなり。然れども、二說は根本の撞着に起因するものなるが故に、其一を正とし、一を不正とすること能はざるものなり。故に、哲學は何れをも取らずして、其調和の本源に達せんとして、永久に探究に從事するなり。宗教家は之に反して、實際の修證を先とするが故に、或は甲說を取り(自力門を組織し)、或は乙說を取り(他力門を建立し)、各〻其一門の原理を守りて、他を容れざるなり。然り而して、前節救濟の必要を說けるは、是れ旣に有限外に無限を認めたる他力門の說系に屬するものなり。之を難ずるに、自力門の原理を以てするは、全く異門の鍵を弄するに過ぎざるなり。二門未判の地位と、一門確立の地盤を考察せば、決して疑難あるべからざるなり。

論理の必然は、之を聞くを得たり。然れども、吾人に現實に無限性ありや、な

しや、若し之れありとせば、他力門の信者とても、同じく現に無限性を有すべきなり。論理上よりは、寧ろ實際の談を聞かんと欲す。佛敎に云ふが如き、悉有佛性は是れ眞なりや、妄なりや。曰く、佛敎の悉有佛性、固より眞理にして、毫末の妄僞なし。然れども、所謂實際の談に至りては、請ふ之を一省せよ。無限に關する實際談は、覺者(現實無限)自らにあらざれば、到底之を爲す能はざるなり。今吾、子と共に現實有限なり、此間に決して無限に關する實際談(現量說)ある能はざるなり。故に(佛陀の我等を敎ふる亦論理を以てす、況んや)吾人相互の談義は、是非共、論理の軌道に依らざる可からざるなり。今子が疑難の如き、現に論理的のものなり。之に對する、亦論理に訴ふるの外、道なきなり。請ふ先づ子の無限性ありと云ふ所以の本據を省察せよ。全く有限無限の關係に於ける論理的觀念にあらずや。既に論理的觀念なる以上は、現實無限の外在も、亦同じく論理的觀念なり。而して論理の必然は彼を取るか、此を取るかの一に決せざる能はざらしむるなり。其一方を取るものは、論理の指導によりて、悉有無限性に決着し、他方を取るものは、同じく論理の必然によりて、悉無無限性の斷案に安住す。故に他力門の信者より云はしめば、自ら無限性なきのみならず、一切の有限に無限性あることなしと斷言するなり。何の躊躇か之れ有らん。

論理の避く可からざること、之を聞くを得たり。請ふ二門を簡擇すべき資料を說け。曰く、甚だ說き難し。何となれば、是れ所謂機(聽者)法(敎門)の適否に存することなればなり。機根と法門と適合すれば、自然に信せられ、然らざれば、終に疑迷を免れざるなり。然れども、今左に少しく二門の外狀を對陳せん。

(內は各門の原理其ものなり)

機法頓漸

故に

自力門には機の不同により開悟に遲速あり。
他力門には法の不同により開悟に早晚あり。
機の品等は各自に取りては命數的なり。
法の品等は各自の選擇に順て隨意的なり。
自力門にありては開悟の頓漸不動なり。
他力門にありては開悟の早晚簡擇自在なり。

難易
- 他力門には悟道の大行、自力の負擔に屬す。
- 自力門には悟道の大行、他力の負擔に懸る。

故に
- 自力の修行は難成難就なり。
- 他力の信行は易受易用なり。
- 自力門は難行道なり。
- 他力門は易行道なり。

（註）法の不同とは、佛敎に於て、或は彌陀を信じ、或は大日を信じ、或は觀音を信ずるが如き是なり。

附
- 故に　自力門の修行は專一不撓ならざるべからず。捨家棄欲等は勿論なり。
- 故に　他力門の信行は自然の發動によるものなり。捨家棄欲等の必要なし。

（二月二十三日午後）

二六。方便

方便の言たる、之を佛書常用の語に採る。而して佛書に於ては、此語の意義に、將た使用に就て、幾多論議の存する所なり。其最も隔絶せる兩義を擧ぐれば、一は方便を以て、虛構詐僞の事とし、一は之を以て直に至重の必須方法の事とするなり。（方便卽眞實、眞實卽方便」と云ふ是也。）然るに、何故に斯く天壤相異なる意義ありやと云ふに、其解釋は甚だ晰然たるもの少しとす。今吾人の解釋、夫れ或は其暗朦を排除するに少補ありやを覺ゆ。抑、吾人の方便を說く、彼の無限の悲知運用の大活路とするにあるなり。其對接する所は、固より有限の心靈たり。是に於てか、識者は既に一團の感發する所あるべし。何ぞや此事業の異常なると是なり。蓋し通常の活動は、有限の有限に對するものたり。無限の有限に對するは、宗敎外に求む可らざる所の奇事業なり。無限が其本眞實相の儘を以てせんか、有限は到底之を受用する能はざるなり。一段の巧策に依て、以て接化の業をなさゝるべからざるや論を待たず。是に於てか、眞實至誠の妙智を動かし、茲に有限に通接すべきの大活路を設く。（所謂善巧方便是なり。）諸敎に神佛の化現を雜說する、蓋し此原理に基くものなり。

是れ他力敎の第一義にして、此に依れば敎相立ち、之に依らざれば敎門開けざるものなり。是に由て方便の成立を探究すれば、方便は無限の眞相より出でゝ、有限の當相を完收せざる可からざるなり。卽ち無限より出でゝ有限に接し、有限を轉じて無限ならしめざる可からざるなり。之を解拆すれば、左の三段あり。

(一)無限之變現――――無限的
(二)無限有限融會――――中和的
(三)有限歸無限――――有限的

無限の變現とは、無限が變じて有限の形式に顯現するなり。有限の形式とは、他なし、空間時間の經緯に於ける因果的事業を起して、以て有限通入の門戸を開示するにあり。(法藏比丘の因位果海の德相卽是なり。)是れ無限にして有限の外形を示すものなるが故に、所謂詐僞的假相と其親を一にするが如きあり。然れども、吾人の常に所謂詐僞なる者は、有限相互の間に於て、欺妄心より出でゝ虛相を構ふるものにして、徹底實誠を缺くものなり。此方便は無限の悲智に發する至眞至誠の妙現なり。焉ぞ彼を以て、此善巧に擬すべけんや。夫れ此の如く、無限の有限に對する活動に於ては、爲に幾何か無限の眞相を隱蔽して、事更に一段の變現權化を必要とするものにして、皮相者の誤想を來すが如きありと雖も、是れ唯第一段にのみ止ることにして、他の二段に於ては、概して此の如き謬見を來すことなし。然れども、其方便たるに至りては、決して異變なきなり。寧ろ方便の方便たる眞格は、此二段に在りと云ふを得べし。何となれば、第一は他二段の爲の手段なりと云ふを得べければなり。此手段の義こそ、亦方便の誤解を來すの一因たるなれ。何となれば、彼の皮相論者は第一のみを見て、方便は之に盡くると思ひ、而して其他二段の爲の手段たるを認るや、方便は卽ち手段なりとし、手段は目的に達する爲の假設、其眞僞虛實は一定ならざるも、到底其範圍內には要素を含蓄せざるものにして、一旦目的を全ふせば、急に撤去すべきものなりと云ふ。而して亦性急の論議に逐はれて、單刀直入的に、始より眞實の目的に入り、假設の手段に依るべからずと唱道するに至る。是れ、方便の第一段は、他二段の爲に手段たるの義を解すと雖も、方便

の眞相を誤るに至りては、大に甚だしきものと云はざる可からざるなり。蓋し手段と目的とは、相對的の觀相にして、其彼たり此たるが爲に、事の眞價に輕重を爲すものにあらざるなり。今方便の第一段は、第二段の爲には手段たれども、第二段は、亦第三段の爲めには手段たりと云ふべきなり。而して第三段も、亦他に此が目的となるべきものに對すれば、同じく手段たるものなり。(法藏の因位果海は、衆生の信心の爲の手段、衆生の信心は、其證大涅槃の爲の手段なり。而して證大涅槃は、衆生濟度の爲の手段となるなり。往相は還相の爲めの手段なり。)

手段　目的

(一)無限の因果　(二)有限の發信

(二)有限の發信　(三)有限の證果

(三)有限の證果　(四)無限の濟度(卽無限の因果)

無限の方便によりて、有限が開展して、自ら無限に到達す。到達し了れば、更に自ら方便を起して、他の有限を開展せしむ。此有限も亦自ら無限に達せば、更に方便攝化の事に從ふ。此の如く展轉して底止する所なく、目的は手段となり、目的は手段となりて、窮止する所なきなり。豈に手段と目的との觀相を以て、其間に輕重を視るべけんや。況んや其間に要不を唱ふるをや。寔に皮相の迷謬と云ふべし。

(一)無限の因果——爲蓮故華——爲實施權——從本垂迹

(二)有限の發信——華開蓮現——開權顯實——開迹顯本

(三)有限の證果——華落蓮成——廢權立實——廢迹立本

(一)無限の因果——蓮破華生——由實設權——從本垂迹

(二)有限の發信——華開蓮現——開權顯實——依迹顯本

(三)有限證無限——華脫蓮成——收權歸實——從迹還本

二七。無限の因果

(二月二十四日)

因果は有限の理法にして、無限は因果を超絶せるものなることは、喋々を要せざるべし。(『骸骨』に「絶對と因果」の節あり。)然るに、今無限が因果の形式に表

現せんとせば、必ずや、先づ其無限の本性を棄却せざる可からざるなり。既に無限の品位を棄却して有限に歸せしが、茲に再び無限の願行を成就せずんば、本位の無限に還復すること能はざるなり。是れ願行の因に依て、還證の果を得ざる可からざる所以の原基なり。而して衆生濟度の業事、此間に成辨する理由は如何と云ふに、先に無限が其本位を棄却するは、抑何の爲なりや、他なし、衆生濟度の大悲に起因するものなり。衆生悲憐の爲に、無上の大覺を棄却し、却て迷界に投入す。是れ其無上位の功德を讓て、衆生に惠施するに外ならざるなり。此に依て衆生の能く此功德を受用するものは、自己の行業によらずして、全く他力の救濟に與惠するを得るなり。(若し此の如く功德利益の循環することなしと云はゞ、無限の無上位を棄却せしむるの功德は、徒滅空消して其當價を止めざるなり。豈に此の如き理あらんや。目前の事實に就て見よ。茲に一金を投ずれば、彼れ一金の受用あるに非ずや。無上功德の投棄豈に代價なくして消滅す可けんや。)然り而して、無限が此の如くして有限に讓與せる功德は、如何にして、其適當の利益を施すに至るべきや。他なし、無限が其讓與の意向を開示して、之を十方に明ならしむると、有限が此開示を認承して、之を受用するにあり。然り而して、此の如き開示と受用は、蓋し相對の事業にして、有限界内の現象たらざる可からざる也。故に此事業は、彼の無上位を棄却して展現したる有限が、其願行に於て、之を開顯せざる可からざるなり。是に於てか、無限讓與の功德によりて、有限大覺の利益は、彼の展現有限の因果の中に包括せらるゝ所以を知るべし。乃ち彼の展現有限が、元の無限に還復する因の願行に於て、有限救濟の本意を發揚する所以は、蓋し此故なり。轉じて他面より之を云はゞ、無限が無限に還復するは、當然のことにして、毫も願行等を要すべきにあらず。然るに無限還復の果に對して、絶大願行の因を成就するは、是れ何の必要にかよる。他なし、此の願行は全く救濟事業の爲なるなり。此願行なくして當然の還復をなすのみならんか、是れ無限の自受用法樂にして、毫も利他の效用なきものなり。唯夫れ願行あり、故に其軌道に轉じ來れる一切の有限をして、皆悉く他力往生の妙利を獲得せしむるなり。(佛敎の他力眞宗は此第二解を依用す。)

第一解 {無限位棄却の功德＝有限救濟の利益
　　展現有限の願行　＝願行相應の證果

第二解 {無限位棄却　＝無限位還復
　　展現有限の願行　＝有限救濟の利益

例 {久遠彌陀　＝十劫彌陀
　　法藏比丘の願行　＝衆生往生の增上緣(卽ち他力)

（二月二十五日）

二八。疑難

方便の事を審聽するに先ち、一箇の質疑あり。他なし、抑、無限は有限を救濟開發するの能力あるや言を待たざる所ならずや。何ぞ事々しく一旦有限に沈み、更に修因還復して、始めて有限救濟の事業を成就すと云ふや。又吾人は有限なりと雖も、自然に無限を認知して、其救濟を信仰するを得べし。何んぞ、事更に無限の悲願成就によりて、始めて聞信の惠に浴すと云ふや。此二個の疑義を氷解せずば、方便の說明亦甚だ傾聽に苦む所あり。請ふ之を詳解せよ。

曰く、疑難の大旨未だ前論に了せざる所あるによるか。請ふ先づ第二難より解かん。疑難に、有限は自然に無限を認知すと云ふ。抑、自然とは何等の作用なりや。宇內の間に存するものは、有限無限の二者に過ぎざるなり。其內に於て、有限自己の力用に依るものにあらざれば、無限の力用に依るものならざる可からず。而して有限の力用に依て無限を認知すと云はば、是れ所謂自力門の談なり。今吾人は他力門の談中にあり、豈に自力門の義を混ずべけんや。（よし自力門中にありても、有限が自力にて無限を認知すと云ふは、審究の上にあらずば了し難き所なり。）既に有限自力の作用にあらずとせば、所謂自然に認知すとは、無限の力用に依て認知する事ならざる可からず。然らば、自然とは全く他力作用なりと云はざる可らず。是れ卽ち吾人が無限の悲願力に依て、有限の信仰を起すと云ふものなり。第二難の趣意は、全く吾人の方便と同一なりと云ふべし。何ぞ疑難とするに足らんや。次に第一難を考ふるに、無限に初より救濟の能力あること、固より論を待たざるなり。然るに無限に絕對相對の二面ありて存すると、亦知らざるべからざるなり。而して有限救濟

の事に從ふは、正に相對的の面に於て之を云ふものにして、彼絶對の面にありては、不動、不作、湛然寂靜たるものなり。是れ吾人が先に無限が其眞相の儘にありては、有限は到底之に接近すると能はざるなりと云へる所なり。而して相對的の面に於ては、無限は有限と相對して、之が開發に任當するが故に、有限適當の變現を示して、其妙用を施すに至る。是れ卽ち吾人の所謂方便に外ならず。而も此相對無限と、彼の絶對と同一體にして、更に分離すべからざるとを、本位に還復すとは云へるなり。故に吾人の云ふ所も、亦畢竟難者の所陳と、其趣を異にせざるを知るべきなり。更に佛敎の所談に就て、之を對說すれば、絶對無限は凝然眞如なり、相對無限は隨緣眞如なり。凝然眞如は其名の如く、湛然として不作一法なり。隨緣眞如も亦其名の如く緣に隨て造作諸法なり。今有限の衆生を緣として、大悲の方便を垂るゝは、則ち此隨緣眞如の妙用なり。流轉・還滅の二門は、蓋し其隨緣の眞相を示すに外ならざるなり。之を以て何ぞ彼の凝然を害せんや。然れども、衆生濟度は隨緣眞如に仍らざる可らざるなり。而して隨緣と凝然とは、其實全く一體なり、還同一致、豈に眞如分外の事ならんや。吾人各個が其涅槃の彼岸に到達するは、是れ隨緣萬法還元の一部分なり。萬法悉く還元し了りて、玆に隨緣眞如の流轉門が、其還滅門を全うするを得るものなり。而して吾人各個が、必ず大涅槃に到達し得べき證據は、何處にありや。眞如隨緣の理に就て、流轉門に於て萬差と顯現せる諸法は、還滅門に於て、同一本源に還歸せざる可からざる必然あるによるものなり。此理に依て、自力門には「悉有佛性」「草木國土悉皆成佛」等の原理を建て、他力門には、無限の因源果海を立つるものなり。

- 眞如
  - 不變
    - 絶對……
  - 隨緣
    - 流轉門
    - 還滅門
    - 相對
    - 無限

流轉門に對し還滅門の必然
- 悉有佛性等——自力門
- 阿彌陀佛の因果—他力門

佛敎他力門に、阿彌陀の正覺は衆生の往生によりて成り、衆生の往生は阿彌陀の正覺によりて就ると云ふことあり。一切衆生往生せずば、彌陀は正覺を

成り給はず、彌陀既に正覺を成じ給へるが故に、衆生の往生疑なしと云ふ。今吾人の言にて云はしめば、一切衆生の往生(卽ち萬法の還元)は、阿彌陀の正覺(卽ち還滅門の必然)より起る。而して既に阿彌陀の正覺(卽ち還滅の必然)あり、故に衆生の往生(卽ち萬法の還元)は、確固不拔なりと言はんのみ。尙他力門には、不變眞如、隨緣眞如を法身上に區別して、法性法身、方便法身と云ふ。其方便法身とは因果的報身佛なり。

眞如
- 不變―法身―法性法身―絕對非因果的
- 隨緣―報身―方便法身―相對順因果的　無限

二九。無限の因果

(二月二十六日)

無限の因果を分解すれば、因と果との二分とす。其因分中に因緣の別あり。

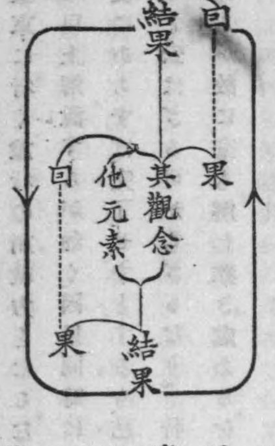
- 無限
  - 因緣
    - 因
      - 形式的原因―願
      - 實質的原因―行
    - 果
- 有限
  - 因緣―教、行
    - 因―信
    - 果―證

因の發動は、常に緣の刺戟に依ること言を待たざるべし。今無限が相對に顯現して發動せんとする、亦此が緣なかる可からず。卽ち其の顯現の當時に在りて、其心面に接し來る所のものは、皆悉く此緣たるものなり。中に就て、亦遠近疎親の別ありと雖も、今之を細說するの必要なきが故に、之を略して、暫く其最も顯著なるものを指說す。彼の顯現が、正しく發心修道の敎化を受くる所の敎主なりとす。此敎主の敎化に順じて、玆に發動する所の因素に、二者の不同ありて存す、所謂願行卽是なり。願は卽ち形式的因素にして、行は卽ち實質的因素なり。是れ心靈的原因の成立に存せざる可からざる所にして、所謂目足の關係を有する所のものたるなり。願ありて行なきは、目ありて足なきものゝ如く、行ありて願なきものは、足ありて目なきものゝ如し。然り而して、願と行とは、諸般の心靈的動作(結局的作用)に通有のものなりと雖も、常途の願行は、是れ有限的のものにして、今此處に云ふ所の願行は、是れ無限的のものなり。其願望する所も無限にして、其修行も亦無限なるものなり。無限の願、無限の行とは如何。曰く、一切心靈の願望と修行とを集めて、一身に荷負する願行卽

ち是なり。是れ卽ち他力門の起り得る所以の根底なり。何となれば、一方に他の願行を荷負する心靈あれば、他方には其願行を荷負さるゝ處の心靈なかるべからず。乃ち茲に一心靈の無限の願行を成就するとあらんか、其他の心靈は、よし願を發し行を具することあるも、是れ唯彼の無限の願行成就の回施向與に預るものたらずんばある可からざるなり。所謂他力回向の願行卽ち是れなり。果して此の如き成就は有り得べきや、否や。是れ茲に考究すべき所なり。是れ又一條の妙談の存する所にして、特に注意を要する所なり。抑、無限の願行中には、一切有限の願行を攝取すべきことは之あるべしと雖も、此の如き願行の成就するとありや。若し之ありと云はゞ、無限時の後にありと云はざる可からざるなり。成就にして無限時の後にありとせんか、今日の有限は到底其恩惠に浴すること能はざるなり。他力門の宗敎、全く吾人に效なしと云はざる可からざるべし。（眞宗『大無量壽經』に、阿難が特に法藏菩薩は已に成佛し給へりや、未だ成佛し給はざりやの問ありて、佛は已に成佛し給ひて今に十劫なりとの答あり。是れ甚だ輕易なる問答の如しと雖も、其實他力門の興廢に關する大問題の存する所なり。因說の終尾、果說の臂頭に此問答ある所以を知るべき也。）今簡單に此が通釋を爲さんに、彼の願行成就が、無限時の後にありと云ふは、畢竟其成就なしと云ふの曲語たるに過ぎざる義にして、是れ他力門のみならず、自力門の願行も總て無限時の後にあらずば、成就することなしと云ふの難にして、畢竟宗敎全體に關する義門なるが故に、其解釋は既に『骸骨』に論明せる所なり。其要は、有限力を以て無限行を成就せんとせば、全く疑難の如しと雖も、彼の宗敎上の修行者は、決して純乎たる有限にあらずして、其實無限力を具するものなり。されば無限力を以て、無限行を成就するにあるが故に、或は頓なる者あり、漸なる者ありて、一定す可らずと云ふにあり。是れ宗敎の全體、卽ち自他力二門の何れに於ても、預了せざる可からざる所なり。然るに、今特に他力門に於て、前疑難の解釋あり。他なし、抑、方便全部の成立に就ては、既に因果の二門を具することを前定するものなるが故に、唯因のみありて、果あることなしと云ふ可からず、又果のみありて、因なしと云ふ可からざるなり。因果具足の方便たらざる可からざるが故に、因も無限にして、果

も亦無限なりと雖も、而も妙に因果兩立して、偏頗の事あるなきなり。此妙用を今强て假譬を以て例解せば、左圖の如じ。

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は連絡せる綱繩なり。(イ)點を(ロ)に進むれば、(ハ)點は(ニ)に達す。(イ)(ロ)の進歩は無限の因に喩ふべく、(ハ)(ニ)の行達は無限の果に喩ふべし。(イ)(ロ)行も(ハ)(ニ)行も共に一繩の回轉なり。猶、無限因も無限の一德たれば、無限果も亦同じく無限の一德なるが如し。此に依て見れば、因の同時に果ありと云ふも害なきなり然れども、因は因にして、果は果たり、而して兩德相妨げず、妙に相關連するものなり。(因果は異時とのみ思ふ可らず。正動反動は同時にして因果を相爲すと云ふを得べし。佛敎唯識に「種子生現行、現行薰種子、三法展轉因果同時」と云ふとあり。此等は皆同時の因果なり。)更に卑近の例解を取らんか、飲食の因によりて、成長の果を得るは、是れ原因結果なり。然るに、飲食の事全く了りて、後成長の事始めて現はるゝにはあらざるなり。飲食の同時に成長あり。然れども、飲食は是れ因にして、成長は是れ果也。因は前にして、果は後なりと云は、論理上の必然のみ、實際時間の前後は必とする所にあらざるなり。又同類の一例を擧げんか、勉業して工匠とならんとするに、勉業全く畢りて、始めて工匠の果を得たりとするは、概言のみ。眞相に就て云はゞ、勉業一歩すれば、一歩工匠となり、二歩すれば二歩、三歩すれば三歩と、比例的に因果相生じつゝあるなり。之を極微に分析して云ふも、勉業一極微すれば、一極微工匠となり、二極微三極微も亦同じ。之を換言すれば、刹那々々に勉業工匠の因果あるものにして、畢竟同時の因果と云ふを得べきなり。更に彼原因の成立を考究すれば、其一元素に結局的原因なるものあり、是れ何物なりや。他にあらず、最終目的の觀念が、原因的の功用あるを云ふに過ぎざるなり。即ち結果の觀念が、原因の一元素たるものにして、所謂展轉因果なるものなり。之を圖すれば上の如し。



東京に行くは、結果たるべき目的なり。然るに、此目的の觀念、即ち東京行の思想が、

東京に行く旅行の刺戟力となるなり。

以上解説するが如く、因果同時に兩存ずるを得る以上は、因はよし無限時の後にあらずば、完了せずとするも、已に果德の顯現せる以上は、因願已に成辨せりと云はざる可からざるなり。特に他力門に要とする處は、此果德の確認にあるが故に、毫も解し難き處あるを見ざるなり。

三〇。願行成就(無限の因果)

(二月二十七日)

方便の第一(無限の因果)は、願行(因)と、其成就(果)との二なること、前段解説するが如し。其願とは何ぞや、自利利他の大道心より起れる願望にして、自利の爲には、已に萬德を圓滿せんとし、利他の爲には、一切萬靈をして各、萬德を圓滿せしめんとする希望に外ならず。所謂極樂淨土、或は安樂世界の建立、卽ち是なり。此淨土世界の成立に就ては、主伴境界(卽ち所謂佛莊嚴、菩薩莊嚴、國土莊嚴)の各、萬多の德相を具へて、無盡無窮なりと雖も、要するに二利圓滿の德相を構設せんとするに外ならず。次に行とは如何と云ふに、他なし、如上の願望を出現せしめんが爲の行業にして、所謂三業(身に行ふ業、之を身業と云ひ、口に行ふ業、之を口業と云ひ、心に行ふ業、之を意業と云ふ。)の修行卽ち是れなり。而して發表する三業の別ありと雖も、畢竟するに皆一心の發動なり。其心迷へば則ち迷界を認め、迷業を行ひ、其の心悟れば則ち淨業を行じて、淨土を建立す。恰も、惡漢は惡黨を結び、義人は義勇團を成すが如し。(義勇團の主莊嚴は徹底義勇の赤誠に溢るゝ主人公にして、其眷屬たるもの亦滿身義勇の忠魂たるべし。而して其逍遙する處は、放目皆義勇の境遇、其行ふ處は接觸悉く義勇の事にあらざるなく、其門に入れば、義勇の風ありて、義勇の香を吹き、其人容を眺むれば、何れも皆義勇心の表相ならざるはなし。是れ卽ち義勇境成就の一端なり。極樂淨土の成就以て推想すべし。)「隨其心染則世界染、隨其心淨則佛土淨」の詳細は、『維摩經』『佛國品』に明なり。就て見るべし。

願行果德の詳細は、容易に得て說く可からずと雖も、要するに、何れも皆悉く無量無邊不可思議なりと云ふべし。今其因願果德の一端を摘述せんに、願條無量なりと雖も、自利、利他、共利の三種とすべし。自利の願は、其結果として主

莊嚴の德相を成ずる所のもの、佛の光明壽命等の德相に關する願是なり。次に利他の願は、其結果として眷屬莊嚴の德相を成ずる所のもの、眷屬の光明壽命の無量を願ずる等是なり。此內特に一切の有限を攝取するの願を他力敎の要願とす。第三に共利の願とは、主伴の兩者が居住する所のものにして、國土淸淨、純善無惡、妙樂圓滿、等の德相を願ずる處のもの是なり。此の如く願因の自利、利他、共利と三樣なるに應じて、成果に主莊嚴、伴莊嚴、國土莊嚴の三者あり。安樂國土の莊嚴は、本願心より起ることを領解すべきなり。其實際は所謂唯佛與佛の知見なりと云ふものにして、無限靈妙の境界、吾人有限の得て測量する所にあらざるなり。唯纔に吾人知見の境界を以て比說せば、眼前の帝國の如く、主莊嚴の君あり、伴莊嚴の臣あり、而して主伴共享の邦國あり、以て輯睦謳歌の燦爛たるあるは、其れ猶安樂淨界に彷彿たるものあるか。有限の現境尙此の如し。無限の樂邦は君臣其莊嚴を異にすと雖も、其內證全く平等一如にして、無限の靈妙を完具し、國土の莊嚴亦復無限圓滿にして、淸明澄潔、熙怡快樂、不可思議なる其相狀、佛陀も亦不可具說の結嘆に歸せざる能はざる所なり。

願
- 自利的
- 利他的
- 共利的

主莊嚴
伴莊嚴
國土莊嚴
衆生世間淸淨
器世間淸淨
果

此の如き願と果との間に立て、所謂實質的原因たる修行は、如何なるものなるか、此亦無量無邊不可思議絕對にして、吾人の得て言語し得る所にあらずと雖も、强て要言して、身業、口業、意業の三大不可思議業と云ふ。（是亦比說たること論を待たず。）『無量壽經』に意業を說て曰く「不生欲覺瞋覺害覺、不起欲想瞋想害想、不着色聲香味觸法、忍力成就不計衆苦、少欲知足無染恚癡、三昧常寂智慧無礙、無有虛僞諂曲之心、和顏愛語先意承問、勇猛精進志願無倦、專求淸白之法、以惠利群生」。身業を說て曰く「恭敬三寶奉事師長、以大莊嚴具足衆行、令諸衆生功德成就、住空無相無願之法、無作無起觀法如化」。口業を說て曰く「遠離麤言自害害彼彼此俱害、修習善語自利々人々我兼利」と。

三一。三種莊嚴

三種の願心に應じて、三種の莊嚴の存することは、論理上の必要と云うて可

なり。然るに今轉じて、更に他の方面より之を說明せば、三種の莊嚴は、是れ萬有の成立上に必然なるものなりとす。其所由如何と云ふに、抑、萬有は是れ有機的組織に存立するものにして、其狀樣之を主伴互具の關係と云ふ。(『骸骨』「有機組織」「主伴互具」の項參照) 其主伴は是れ相對差別門上の談にして、其互具は是れ絕對平等門上の談なり。而して絕對相對不卽不離にして、平等差別不一不二なるを槪稱して、主伴互具とは云ふなり。(或は主伴互融と云ふも可なり。) 此二門の圓滿成就の相、之を器世間淸淨、衆生世間淸淨と云ふ。中に就て、相對差別門の衆生世間淸淨は、更に二面に分れて、一は主莊嚴となり、一は伴莊嚴となる。蓋し差別には必ず主伴なかる可からざるは、是れ差別の差別たる所以なればなり。此の如くにして、三種の莊嚴は、是れ平等差別、絕對相對の兩門上に於て、德相の圓滿を開說するものに外ならざるなり。德相の圓滿、此三種の莊嚴に出でざる可からざること、豈に必然ならずや。

無限の德相
- 平等(絕對)
- 差別(相對)
  - 主的——主尊莊嚴
  - 伴的——伴屬莊嚴
  - 國土莊嚴——器世間
  - 衆生世間
  - 淸淨

(天親菩薩『淨土論』に曰く「二十九種の功德、三種の莊嚴、二種の世間は、一法句に略入す。一法句とは淸淨句是なり」と、以て想ふべし。)

(二月二十八日)

三二。淨土

淨土と云ひ、極樂と云ひ、安養と云ひ、樂邦と云ふ等、其名各、異りと雖も、蓋し先に言ふ處の二世間、三莊嚴の謂にして、主伴なきの國土を云ふにはあらざるなり。無限の願心に自利、利他、共利の三者あるが故に、其成就の果報に主、伴、國土の三者必具すること、勿論と云はざる可からざるなり。唯簡單に稱擧するに當て、共利の果報たる國土を以てすると見て可なり。然り而して、茲に疑問の生ずる所以は、此の如き三種莊嚴は、是れ果して有形的に某方位に歷然として存在するものなりや、否や、と云ふにあり。直答せば、然りと云ふの外なきなり。然れども、今少しく之を詳論せば、抑、彼の三莊嚴は是れ無限の果報にして、吾人有限の得て推想し得る所にあらざるなり。唯已に自利利他共利の三因願心あるが、此に應じて三種の果報あることを說かざる可からざる必要あり。然

れども、既に是れ有限界の言説を超絶せる妙境界、之を説かんとするに亦窮せざるを得ず。是れ進むも窮し、退くも窮する所、乃ち止を得ず、有限の境界に就き、其勝なるものを取て、之を比説し得るに過ぎざるなり。故に彼の無限の妙境、全く有限の言説の其の如しとするは、誤謬を免れざるものと知るべし。然れども、吾人が吾人の言説を以て事物を指示するは、唯吾人の境界相應に之を認むるに止まるものにして、事物の眞相に至りては、未だ之を以て盡せりと云ふ可からざるなり。佛教に所謂一水四見とは、此事情を比解せんとするものなり。吾人が見て水と爲すものを、天人は以て瑠璃となし、魚は以て住所と爲し、餓鬼は以て火と爲すと云ふ。然らば、此四見何れが正、何れが不正なりや。一も正なるものなく、一も不正なるものなし。各、其境遇に相應したる點より云はゞ、何れも正當なりと雖も、若し夫れ己の所見を以て、他を律せんとせば、何れも不正たらずんばあらず。之を行業果報の不可思議と云ふ。蓋し彼の四見の心靈は、各、其過去の行業の因によりて、現在の境にある果報を受得し、其果報の境遇に應じて、或は之を水と認め、或は之を瑠璃と認め、或は之を住所と認め、或は之を火と認むるもの、唯之を不可思議と云はんのみ。強て其理由を求むるも、豈に得可けんや。有限の境界尚且つ四見の不同ありて、一概に推論す可らず。況んや有限の言説を以て、無限の妙境を説破せんとするをや。豈に不可思議を忘る可けんや。夫れ此の如くなるが故に、彼の妙境に就て、其有相無相、有形無形、有方無方を論ずるが如き、豈に盲者の評色のみならんや。若し夫れ吾人の信仰の必然より、吾人相應の知見に住して之を假想せんとせば、之を有形とするも、之を無形とするも、各、其知見に住して可なり。豈に一概に律定するを要せんや。唯行業果報は不可思議なることを忘る可からざるなり。

（此に依て『無量壽經』の樂邦段に於て、阿難の佛に對する質問ありて、佛は乃ち行業果報の不可思議を宣揚し給ふ。是れ一見輕端の事の如しと雖も、其實樂邦段の全體に關する註釋なり。注意せざる可からず。）（先に「隨其心淨、則佛土淨」の説を引けり。以て對考すべし。）（尙ほ生卽無生の段をも參照せば、益する所あるべし。）

三三。伴屬莊嚴

三種の莊嚴中に就て、國土莊嚴と主尊莊嚴とは、其由來知る可きなり。是れ有限界の上に在りても、心境(主客の兩觀)あるに等しければなり。然るに、獨り伴屬莊嚴に至りては、是れ無限界の特象にして、有限界に見る能はざる所のものなり。何んとなれば、有限界には、彼此各々個々別立して、互に相下らざるが其當相なればなり。一有限は如何に之を打檢するも、其內に他の有限を從容すべき必然を具へざるなり。然るに無限に至りては全く之に反し、一物も其範圍外に存するを許さゞるなり。故に有限如何に夥多なりと雖も、皆無限の內に包括せられざる能はざるなり。是れ無限の主尊には夥多の伴屬なかるべからざる基本なり。然りと雖も、既に是れ伴屬なり、主尊の自體と同一のものにあらず。主尊より云へば、全く他外の體なり、別箇の靈なり。果して然らば、其出處は如何、其由來は如何、是れ茲に究定せざる可からざる問題なり。而して此問題こそは、實に他力敎中の最大要義たるものなれ。請ふ先づ伴屬莊嚴の由來を思へ。是れ卽ち因中の利他的願望より成就せる所の結果なり。而して因中の利他心は、是れ全く願主の對外觀察により、出生せるものにして、所謂大悲攝化の方便の現出する本源に發するものなり。卽ち大悲方便の目的は、何にありやと云ふに、正しく迷界の一切生靈を攝引して、自家同一味の伴類たらしめんとするに外ならざりしなり。所謂敎化の本源、救濟の大目的たる迷界の萬靈こそ、正に此伴屬莊嚴の出處たるなれ。伴屬莊嚴の因果、大に考究せざる可からざるなり。

伴屬莊嚴——利他心——迷界心靈

三四。有限の信心(華開蓮現)　(三月一日)

伴屬莊嚴の由來出處は、既に之を說けり。而して此莊嚴の因果は、實に無限の夙に設計せる處にして、特に、方便の第二第三段は、全く此事なり。今其第二段有限の信心を略述せば、是れ上の蓮華開發の處に現出する所生の蓮實、其物なり。抑、蓮の生長は、他の多くの生物と同じく、實より華を開て、華中に實を結

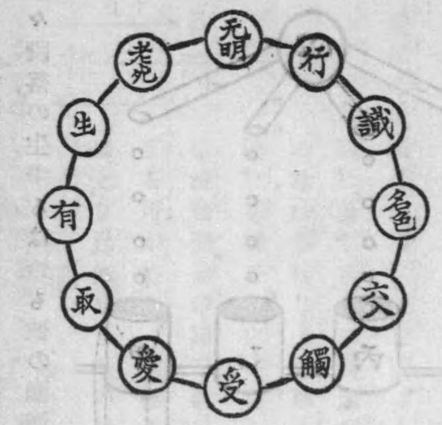
び、展轉開成して次第に繁殖するものなり。今無限の開發亦之に同じ。最初に一無限の開成するあれば、其因果中に他の有限の開成を包藏し、此增上緣に依て開成せる無限も、亦其他の有限を開成せしめ、展轉引導して開發止むことなし。恰も蓮々轉生して、繁殖止まざるが如し。唯蓮は有限生のものなるが故に、一定の期を過ぐれば、古蓮は次第に枯死散消すと雖も、無限は其名の如く、無限生のものなるが故に、此の如き死消あることなく、各自の意樂に應じて(還相回向)變現應化の事あるのみ。然り而して、此の如き展轉開成の相續するは、如何なる設計によるや。(蓮の成育は、到底無限の開成と同一にすべからざるを此に明白なるに至る。)他なし、先に少しく暗示せるが如く、有限の願行は、其内に一切有限の願行を攝すべきこと論を待たざるなり。而も亦各、有限の有限的願行にあらずして、無限的願行を攝するなり。即ち一切有限が、各、無限に開展せんとするの願行を攝盡するものなり。然らずんば、無限の願行は、眞の無限の願行にあらざる可ければなり。是に於てか、疑なき能はざるものあり。有限各自の無限的願行にして、此の如く既に他の爲に攝せられんとせば、各、有限は疾に此事を了知しあらざる可からず。然るに、實際此の如きことあるが如し。現に一切有限が各自に皆此事を了知しあるにあらざるのみならず、其僅に無限的願行を覺知せるものも、亦未だ既に他に攝せらるゝことを知らず、各、自ら始めて之を發起せるものと思へるにあらずや。各自發得の願行を以て、他力回向のものとするものは、蓋し百千中にも一二ありや、なしや、疑はしかる可し。是れ、此處に論述し來れる所說に背反するものならずや、如何。答て曰く、疑難の要旨一理ありと雖も、是れ未だ全系を了せざるものなり。蓋し無限方面よりの所說を聞て、未だ有限方面より來れる所說を聞かざるの過なり。抑、有限が翻然として悟達の道に入ることは、一言に云はゝ、自然に偶然に此に到ると云ふ可し。(自然は卽ち他力なり。)是れ他力門に限ることにあらず、自力門に在りても、有限が各自の無限性を具することを覺知するは、同じく自然偶然なり。(「悉有佛性」とは悟達者の敎說なり。有限一般の原信にあらざるなり。)然るに、今進んで所謂自然偶然を一考すれば、其早晚不定なるは、若干の事情あるにあらずば、到底解すべからざることなり。而して其事

情とは他なし、有限各自の業報なるもの則ち是れなり。（宿善開發によりて信念を發得する、則ち是れなり。）

三五。有限

（三月二日）

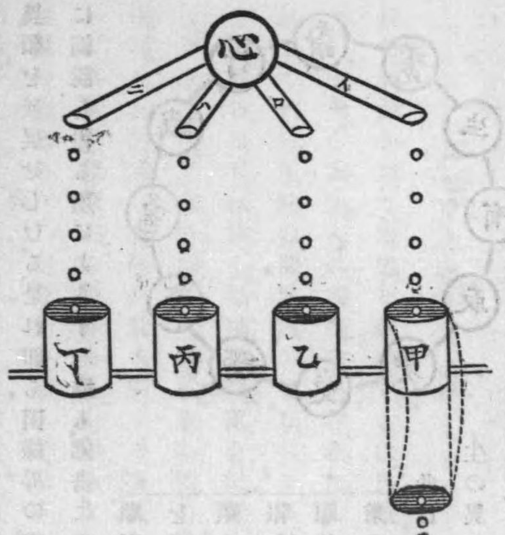
物各其眼を以て境遇を觀察するは、自然の事にして、亦然らざる能はざる所なり。宇内の萬象、夫れ或は唯一存在たるべしと雖も、其之に對する所の心鏡に映じて、萬殊不同の世界觀となるべき事、豈雷一水四見のみならんや。故に今有限界の萬有組織と、無限界の萬有組織と大差あるべきこと、固より當に然るべき所なり。彼の業報の談（宿業の議）の如き、亦其一端たるものなり。今之を解釋せんが爲に、有限全般に關する要義を略述すれば、有限の生存は有限にして、其前際後際共に限界あるや勿論なり。夫れ然り、故に過去を追想すれば、無量の生死ありしを否する能はず、未來を推考すれば、無量の流轉あるを拒む能はざるなり。之を名けて、無始曠劫、未來永劫の流轉輪廻と云ふ。而して此の如き流轉輪廻の相續は、是れ皆因果應報の鐵軌に統制せらるゝものにして、所謂因緣生の境界たるもの、卽是れなり。卽ち一生の行業は、其善惡（無記）の性質に應じて、勝劣苦樂の果報を引起し、大小の因果展轉重疊して、億萬不可計の異類を發展せしむる、是れ卽ち因緣界の當相なり。其因緣業報の詳細は、今茲に備說し得る所にあらずと雖も、佛書に常說とする所の要略を擧ぐれば、



順現業とは、現生に於て其行業の果報を感受するもの。
順次業とは、次生に於て現生行業の果報を感受するもの。
順後業とは三生乃至多生の未來に現業の果報を感受するもの。

此は現生の行業の因に依り、其果報する生の異に從て、區別したるものなり。其各生の因緣生起は、他の說明を待つものなり。而して其說明とは所謂十二因緣卽ち是れなり。

今之を譬説すれば、造業の間斷なきは漏滴の止まざる者あるが如く、其間に生々段落の生ずるは、恰も彼の漏滴が一器に滿つれば、其器自ら一轉して、更に新滴を受くるに至るが如し。而して其順生順次等の分るゝ模樣は、彼の漏滴に油、水、種々の液質ありて、其滴落するに當りて、各液其質に由て、別々器に流注するものと思ふべし。蓋し液質の殊別なるは、造業の殊別なるに比し、其別流するは、彼此の造業相拒相排の能ありて、只一類相應の業のみ相寄て、一生命を結成すること、恰も同類大小の漏滴は同器に注入して、此に集合するが如きに喩ふるものなり。



圖解。一器傾覆中は他器は傾覆せざるものとす。且つ傾覆の器其内容を注射し了れば、直に本位に復立し、同時に他器中最滿の一個傾覆して注射を始むるものと思ふ可し。

三六。造業種別

（三月三日）

業報の大略は前項に之を説けり。而して其生界の種々の等級に別るゝ所以は、蓋し造業に善惡淨染の差等あるに依るものなり。善惡標準の論は多樣なりと雖も、宗教上に正確なりとすべきは、無限に向ひ進むを善とし、之に背き退くを惡とするにあり。（『骸骨』參照）然るに流轉開發の事を詳にするには、更に造業に淨染の別あるを知らざる可からず。其淨とは、無限を覺知したるの行業にして、其染とは、之を覺知せざるの行業なり。

業
- 淨
  - 善
  - 惡
- 染
  - 善
  - 惡

淨或は無漏と云ひ
染或は有漏と云ふ

三七。煩惱

染淨の不同は、行業上に大關係を有するものにして、宗教上の最大要義の一なり。今其然る所以を略陳せば、宗教の目的は、有限を無限に開展せしめんとするにあり。所謂轉迷開悟は卽是なり。迷とは無限を遠離する境界にして、悟とは無限に近合する境界なり。此迷悟の分るゝ所以は、一に無限を覺知すると、せざるとに起因するものなり。固より覺不覺に關せず、善惡の業因によりて、昇沈の事ありと雖も、是只迷界中の盲動にして、此の如くして悟境に達する能はざるなり。蓋し無限に進向する一程の度に至れば、必ず無限の覺知に入りて、更に昇進すべしと雖も、若し此の覺知なきときは、到底此程度以上に及ぶ能はざるなり。其段落の地位を略圖せば、

見性——不退
見道世第一法
初信凡夫
歡喜地
賢位

段落の着位は此の如くなりと雖も、是れ唯液體の一程溫度に至りて、卒然沸騰するが如きのみ。若し其下層を探りて、加熱の有樣を檢し來れば、唯度々の增溫に依る者なり。(所謂煖法とは火熱大に增進したる位なりと云ふ。以て比較すべし。)而して熱の進むは寒を排するに因る。寒氣全く消滅すれば、堅氷茲に溶解するを見る。(氷と水の喩は、佛法の常套なり。)然り而して、此氷結の本源たる寒氣は是れ何物なりや。佛家に所謂煩惱是なり。蓋し吾人をして迷界に繫ぎて、煩悶惱苦せしむるに名けたる者なり。是れ何物なりや。他にあらず、無限を覺知せしめざる暗昧心にして、所謂不覺或は無明是なり。此れ元と一個の昧心に過ぎずと雖も、所謂毫厘の差千里に至るもの、終に八萬無量の塵勞と成るものなり。今之を略說すれば、凡そ稱算して八萬四千と云ふ、收めて百八となし、更に括て十使とし、尙又攝して三毒とす。三毒とは貪慾、瞋恚、愚癡是なり。而して其本源は、唯一の根本無明に過ぎざるなり。有限無限の關係によりて之を表すれば、抑、各個の有限は其無限に對する關係と、他の有限に對する關係の二者あり。前者を覺知するは、先に謂ふ所の見道の淨信な

り。此覺知は自然に必然に、彼の有限に對する關係覺知をも包含するものなり。然るに後者の覺知は、前者の覺知を包括する能はざるが故に、單立孤行する時は、則ち顚倒の妄心となり、彼の有機組織、主伴互具の關係を了せざるが爲に、各個獨立の誤想よりして、有限界內、怨敵仇讎的の迷謬よりして、無限其自らに對しても、亦反抗の勢を生ずるに至る。此より三毒を生ずるの有樣を圖示すれば、左の如し。

- 無限に對する覺知。
- 無限に對する不覺(唯有限のみを實在とする迷謬)
- 見道淨信(能發一念淨信)
- 根本無明
- 無明
  - 順境に對しては貪慾となり、
  - 逆境に對しては瞋恚となり、
  - 中境に對しては愚癡となる。

三八。無明

進んで轉迷開悟の要義を述んとするに先ち、迷の根本たる無明の說を明にせざる可からず。蓋し源泉明ならざれば末流の明なるを望む可からざればなり。然るに、無明は到底有限智の說盡し得る所にあらず、畢竟不可思議なるもの(『骸骨』四九頁、七九頁參照)にして、吾人の說明以外に在るものなり。今唯其外形のみを提示するを得るのみ。其實體の有無を問ふに、有と云ふ可からず、無と云ふ能はず。何となれば、無限の眼より見れば、其體あるべからずと雖も、有限の眼より見れば、其體なしと云ふ能はざればなり。乃ち有限の方より無限に對する關係を審せんとするに、到底之を盡す能はざるなり。此に因て、事物の眞相に迷ふことは、實に現前疑ふ能はざる所なり。然るに、無限の方よりして、有限に對する關係を知らんとするに、其涯底を悉して餘す處なく、瞭々昭々毫も不明の存すべきなし。故に、無明は有限無限徹底の關係にして、吾人有限にありては、實に迷情の本源たりと雖も、彼の無限界の覺者にありては、是

れぞ萬有本眞の眞理たるものなり。是れ無明は眞如に不一不二なる所以なり。（有限界には眞如無明は不一なり、無限界には二者不二なり。）夫れ既に無相、業相あり、此より轉じて、能見相、境界相を現じ、更に進んで、執取相、計名字相、業繫苦相に入り、乃至八萬四千塵勞門に趣向すること『起信論』に就て詳にすべし。

三九。迷悟凡聖

（三月四日）

有限無限の關係を覺知せざる（卽ち無限を覺知せざる）本源よりして、能所彼我隔歷の妄見よりして乃至八萬不可計の塵勞門に繫在する境界、之を名けて迷界と云ひ、此界の住者を凡夫と云ふ。之に反して、彼の顚倒の妄見を翻掃し、有限無限の關係を覺知せる（卽ち無限を覺知せる）より以上の境界、之を名けて悟界と云ひ、此界の住者を聖人と云ふ。而して凡夫に數等（否無數）の階級あると共に、聖人に亦數等（無數と云ふも可なり）の階級あり。佛敎に之を大別して、六凡四聖と云ひ、或は內外凡、賢聖、等の名稱を立つ。中に就て、凡夫に階級あるは當然見易き所なりと雖も、聖人に差等あるは如何と云ふに、是れ他なし。彼の煩惱妄見に八萬不可計の別あるが如く、此煩惱妄見の習氣に、亦八萬不可計の異あるを以て、之を伏斷するの多少に隨つて、聖人に等差なき能はざるものたるなり。之を略圖すれば、左の如し。

- 相對
  - 妄界（衆生界）
    - 凡——妄見界（內凡、外凡）等　迷界
    - 聖——妄習界（七賢、七聖）等　悟界
  - 眞界（佛界）——大聖
- 絕對——眞妄是一——凡聖不二——迷悟不離

四〇。轉迷開悟

宗敎の要旨たる轉迷開悟は、前項迷悟の諸階級中に於て、劣等より進んで優等に入り、（凡の方を劣と云ひ、聖の方を優と云ふ。）終に悟界の極點大聖の位に

達するにあり。此に自力他力の二門あること、先に指說せるが如し。而して之を妄見妄習の方面に就て解せば、自力門は妄見の枝末より刈除し、進んで幹根を切斷するにあり。他力門は先づ妄見の根本を控除して、枝末を自然の消滅に任ずるにあり。妄習の排泄に至りても、自力門は妄界にありて之を洗除せんとし、他力門は眞界に於て之が脫落を期するものなり。

四一。他力信行

自力門の斷惑證理は、茲には之を略し、主要なる他力門の信行は、今正に其說明を爲すべき所なり。蓋し此信行は、是れ正しく前項所說の妄見の根本を控除するものなり。其樣如何と云ふに、此信行是れ正しく、有限無限の關係を覺知する(卽ち無限の大悲を覺知するより起るものにして、全く悟道の源底に達せるものなり。既に悟道の源底に達せる者なるが故に、其迷界の本源を控除するものなるや勿論なり。(二者は兩立せざる者なればなり。)本源にして既に控除せられんか、自然に枝末の枯落せん事、言を待たざるものなり。故に他力門には、妄見の伏斷を多言せざるなり。唯彼の無限の覺知は最重の要義にして、其相續は實に一敎の要目たり。之を信行と云ふ、亦眞覺眞習と云ふべし。

信—眞覺—悟無限覺知
行—眞習—眞覺之習性

此眞覺が如何にして、迷情の本源を直斷し得るや。他なし、是れ無限的の妙用なればなり。而して無限的の妙用が、如何にして有限の心靈に存し得るや。他なし、顯在無限の廻向賦與に依るが故なり。其他力回向の必然は、先に無限の因果中に明なるが如し。

四二。獲信因果

然り而して、此の如き回向は、同一齊に一切の有限に受得せらるゝやと云ふに、是れ有限獲信の因果上、然る能はざるものありて存することを、知らざる可からず。然らずんば、所謂他作自受の邪義を免れざるなり。今其正當因果、卽ち獲信の自作自受なる所以を辨せば、抑、前段所說の如き無限の眞覺の受得す

るに至るは、其由て來る所の歴然たる基本なくばあらざるなり、如何。他にあらず、有限が其過去曠劫の流轉中に於て、蓄積し來れる宿世の善根こそ、正に此の無限大信獲得の基本たれ。然らずば、何ぞ忽に此妙福に遭遇するを得んや。而して宿善の厚薄は、有限各個にありて、互に不同なき能はざるや、固より其所なり。故に萬多の有限が、其淨信開發の時機に於ては、一齊なる能はざること喋々を待たざる所なり。然れども、是れ決して無限の德を損するものにあらざるなり。無限平等の大悲は、齊しく同時に十方世界を照曜すと雖も、有限盲者の因果は其眼孔を翳蔽して、光明を受くる能はざらしむるなり。有限無限兩者の因果相湊合して、茲に始めて有限獲信の時機到來すること、豈に然らずと云ふを得んや。

四三。正定不退

（三月廿六日）

歡喜地
阿惟越地

異名、見道位
見性位
悟位

十 平生業成
他力門の特徴

他力門の信者、正信獲得已後を正定聚不退の位に住すといふ。正定聚とは、正に大果を成ずるに定まりたる聚類の義にして、又宗教上の大安心、正に定りたる聚類の義と云ふべし。蓋し有限の身心、頓に無限の資格あるを自覺する の位（悟位、見道位、見性位と名くる所以）にして、宗教實際上、最も重要なる地位たること論を待たざる也。其地位に至れば、茲に將來の大證果に安心するが故に、其喜悅亦甚だ顯著なるものなり（歡喜地と名くる所以）。且つ一たびこゝに到るものは、彼の大果に至らずして、前の有限地に退却する事なし（不退轉地と名くる所以）。是れ他なし、彼の無限他力の、此信者を住持して、攝取する事あるが故也。更に此他力門の正定聚不退轉者は、自己の行業に依らず、純ら他力の救濟に任ずるものなるが故に、此地位よりして彼の大果に到るに、夥多の階次を經るを要せず。此土命終の立所に、大般涅槃の妙果を證得す。故に、此點よ

りして此位を觀ずれば、正さに是れ等正覺地(妙覺の前位)に相應するもの也。

然り而して、此位に附屬して、所謂平生業成の一大事あり。是れ他力門の他力攝取の特徴にして、大安心大歡喜の存する所以の要義也。其趣意如何と云ふに、他力門の奉敎者は、其正信決定の上は、更に一行業の以て證果の爲めに修すべきなく、未來大覺の業事は、全く成辨し了せる有樣を、平生業成とは名くる也。是れ卽ち大慶喜心の相續し得る所以の源泉也。之を自力門奉敎者の有樣比せんか、益〻其妙致を領解し得べし。何となれば、自力門奉敎者は、假令一段にの不退位に達すと雖も、其上の階次は、更に幾何の難行苦修を勉めずは、妙覺の大果に進む能はざるが故に、不退位の歡喜も、亦前途進修の念慮に擾妨せらるゝを免かれざる也。これ他力門の不退位は、前後二途に對して正定歡喜地なりと雖も、自力門不退は、唯後途に退轉の憂苦を除きたるのみにして、前途の證果に對する煩慮を去らざるの大差違あるに由るもの也。

四四。信後行業

(三月廿七日)

正信決定の者は、正定聚の位にありて、平生業成の處に在り。最早自己成果の爲めに、別に修すべき行業あるなし。然れども、尙ほ此生を存續する間は、日夜幾多の行業に從ふもの也。此信後の行業は、宗敎上に如何の資格を有するものなりや、是れ一考すべき所のもの也。

今其大要を述ぶれば、抑〻正信一旦決定せば、其觀念常に心裡に相續して、毫も間斷する事なし。之を純一相續の憶念心と云ふ。既に心裡に憶念の相續するあらんか、其內心自然に外相に表發する事、亦當然也(心內にあれば、行外に現はるゝもの是也)。卽ち信者の身口意に發動する所の行業は、皆悉く此憶念心の外發作用に外ならざる可き也。然り而して、信者の行業、常に此の如き淨業たる能はざるものあり。他なし、過去曠劫の迷的惰勢は、現在の生身に薰染して(過去經驗の結果が現身に積集して)、彼の淨業の相續を妨害するもの也。故に正信決定後の行業は、或淨或染、轉た相交錯して一定ならざるを見る。今之を有限無限の關係に就て略說せば、有限は各〻別立のものなりと思ひて、曾て我他彼此の念を忘るゝ能はざりしも、一旦無限に對向し來れば、主伴互具の關係

瞭然として掩ふべからざるに至る。而して一旦瞭然たりし關係は、常に相續して永劫不斷なりと雖も、有限個立的の宿習は、尙ほ其習慣惰勢を奮うて、常に此主伴互具の關係を壅蔽せんとすることを免れざる也。是に依て、或は正念、或は邪念と、現生の間は、正邪の行業が紛亂交錯して一定せざる也。

四五。信後風光

獲信の得益甚だ多條なりと雖も、一括して之を云ふ時は、宗教の目的を遂成して、信者の心底一大安喜の發現するにありと云ふべし。所謂慶喜歡喜と稱するもの是也。此の喜心たるや、一旦現起の後は、永く繼續して斷絕することなく、轉じて萬多の場合に表發し、信者の一生をして悠々樂む所あらしむることと、固より其所也。

然れ共、是れ唯一方を觀じて、未だ他の一方を察せざるもの也。他なし、他力攝取の淨面に對して、宿習侵襲の染面を認めざるもの也。故に、若し夫れ煩惱其勢を潛めて、正念尅復の時には、常に爾然として淨念の煥發するありて、信者をして、既に極樂界中に在るの思ひあらしめ、或は身自ら既に正眞の大覺たるの念に住せしむるに至る。所謂……

「有漏の穢身は變はらねど、心は淨土に住み遊ぶ。」

又

「信心よろこぶ其人を、如來とひとしとときたまふ。」

等の意と契當するもの也。

然れども、信心決定の行者、必ずしも忽ち全く佛陀と化し、常に淨土に住するにあらず。彼の自力門大悟の大士も亦、悟後の修行の全からざる間は、生身の佛陀にあらざる如く、他力敎門の信者、其信心實に金剛の堅を持すと雖も、若し夫れ煩惱紛起して、邪念强盛の時にありては、或は外道惡魔に近似することなしと云ふ能はざる也。唯

「貪瞋の煩惱はしば〳〵起れども、まことの信心は彼等にも障へられず。
顚倒の妄念は云々」

の聖語を諦念して心身を安靜ならしめ、深く小心戒懼すべきあるのみ。

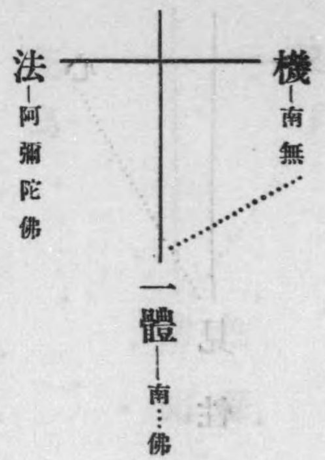
他力門哲學骸骨試稿 畢

第三 隨感錄

引

この錄は、先生が明治三十一年の頃、大濱四方寺に在せし頃、半紙の手帖に記されたる圖也。我等親しく先生の化を受けたる者、この圖に對して、先生が哲學及宗教上に有し給ひし意見を髣髴の間に見ることを得べし。この圖を讀む人は、線及點線の方向に注意するを要す。

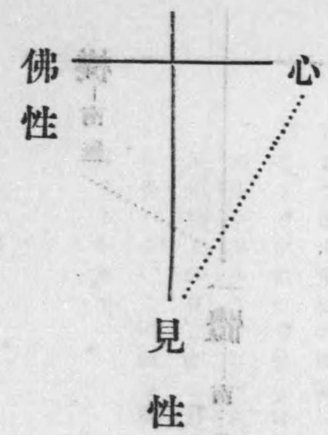
第一圖



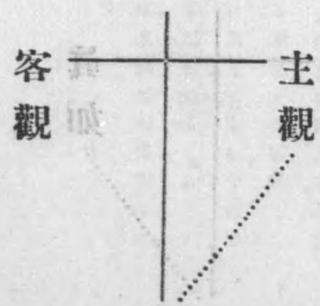
第二圖

註。萬法と自覺との間に點線を引き、又之を消されたり。

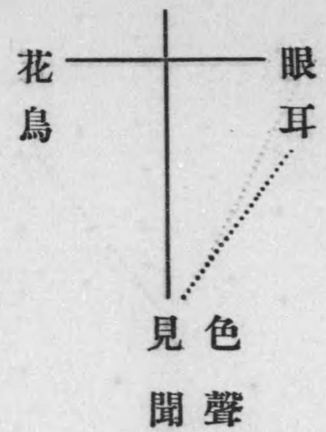
第三圖



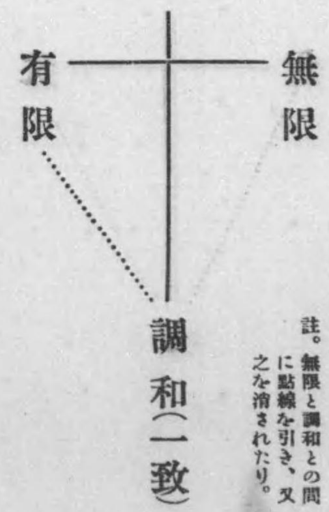
第四圖



第五圖

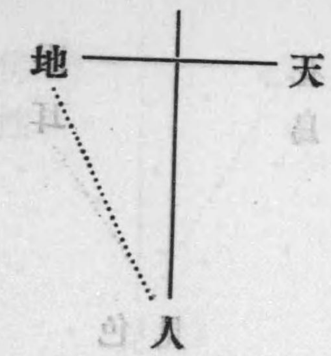


第六圖

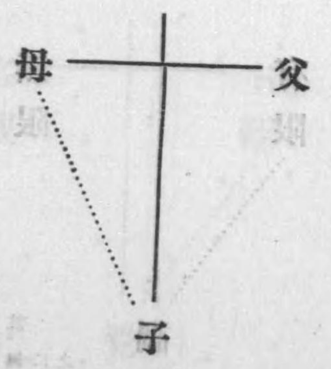


註。無限と調和との間に點線を引き、又之を消されたり。

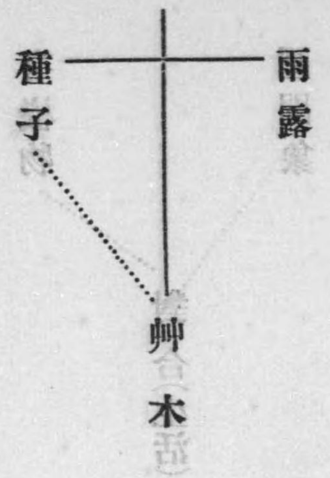
第七圖



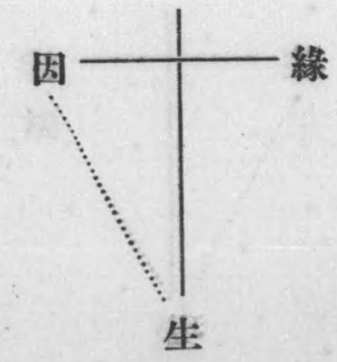
第八圖



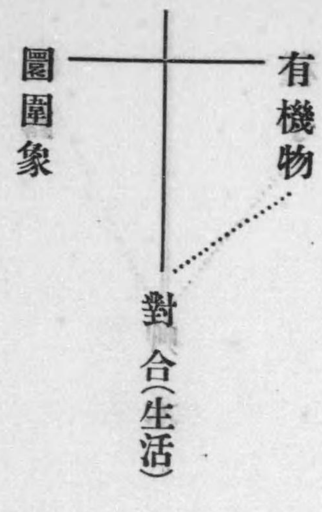
第九圖



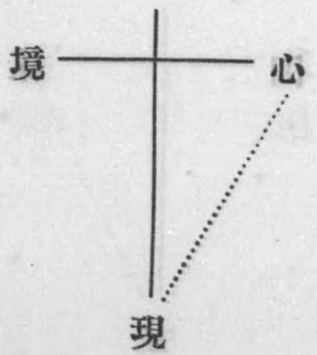
第十圖



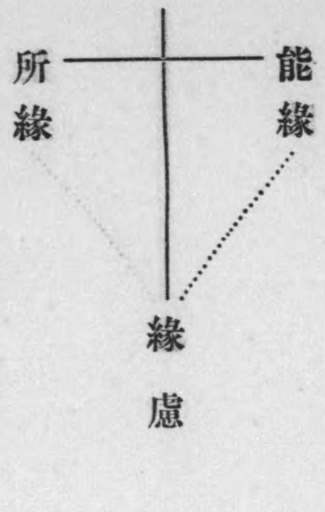
第十一圖



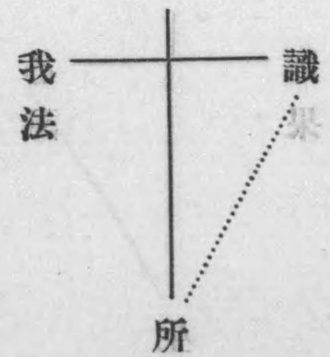
第十二圖



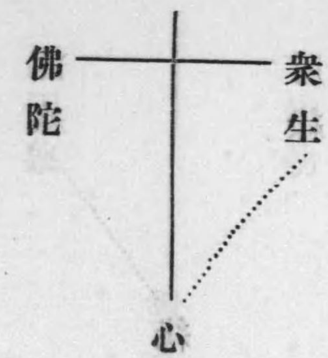
第十三圖



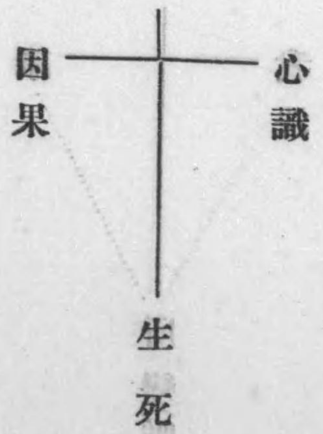
第十四圖



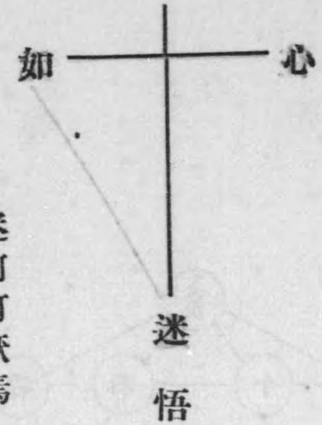
第十五圖



第十六圖

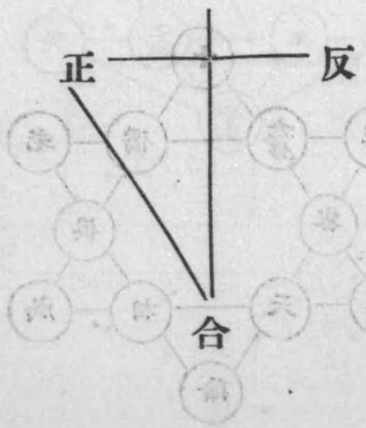


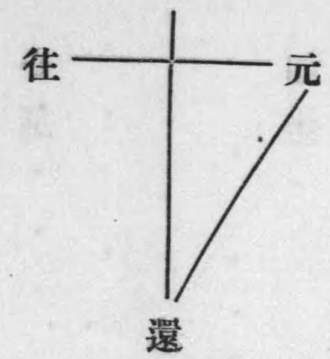
第十七圖



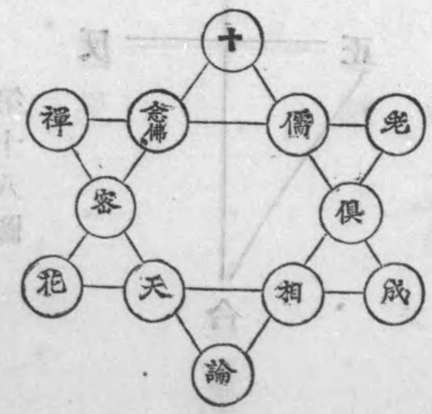
迷何可厭焉
悟何足欣焉

第十八圖



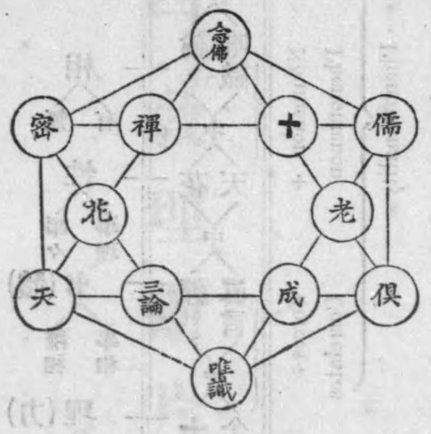


第十九圖



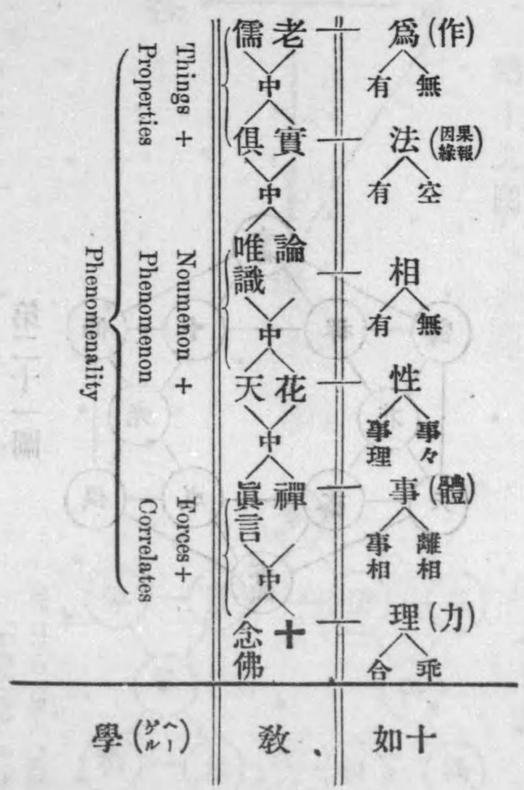
第二十圖

註、以下の三圖は「思想開發項」四、「宗教の基想」を參照すべし



第二十一圖

第二十二圖



第四 教理斷片

一。宗教の天地

南無阿彌陀佛—機法一體—心境不二—色卽是空—空卽是色—一色一香無非中道—心佛及衆生是三無差別—煩惱卽菩提—生死卽涅槃—一斷一切斷—一卽一切—一切卽一—眞如是萬法—萬法是眞如—萬法唯識—三界唯一心—生佛一如—依正不二—十界互具—主伴無盡—事々無碍—一心法界—攝在一刹那—三諦圓融—理智不二—理事無碍—娑婆卽寂光—迷悟不二—染淨一如—是心是佛—一切衆生悉有佛性—諸法實相—草木國土悉皆成佛—一念三千—本來無一物（本來は無限也無一物は有限也）

（右は先生自用の『宗教哲學骸骨』のうちに挾みありたる紙片に記載さる。其の書風より察するに、恐らく明治二十六年頃の筆ならむ。）

二。南無阿彌陀佛

南無者歸命、亦是發願回向之義、　阿彌陀佛者卽是其行、

以此義故必得往生。

南無者有限也、　阿彌陀佛者無限也、

故南無阿彌陀佛者有限無限之一致也。

南無者機也、　阿彌陀佛者法也、

故南無阿彌陀佛者機法一體也。

南無者萬法也、　阿彌陀佛者眞如也、

故南無阿彌陀佛者萬法是眞如也。

南無者色也、　阿彌陀佛者空也、

故南無阿彌陀佛者色卽是空也。

南無者一色一香也、　阿彌陀佛者中道也、

故南無阿彌陀佛者一色一香無非中道也。

南無者衆生也、　阿彌陀佛者佛陀也

故南無阿彌陀佛者生佛一如也。

南無者差別也、　阿彌陀佛者平等也、

故南無阿彌陀佛者差別卽平等也。

南無者人也、　阿彌陀佛者神也、

故南無阿彌陀佛者神人合一也。

南無者事也、　阿彌陀佛者理也、

故南無阿彌陀佛者事理不二也。

南無者一念也、　阿彌陀佛者三千也、

故南無阿彌陀佛者一念三千也。

南無者生死也、　阿彌陀佛者涅槃也、

故南無阿彌陀佛者生死卽涅槃也。

南無者煩惱也、　阿彌陀佛者菩提也、

故南無阿彌陀佛者煩惱卽菩提也。

南無者一切衆生也、　阿彌陀佛者悉有佛性也、

故南無阿彌陀佛者一切衆生悉有佛性也。

南無者汝等所行也、　阿彌陀佛者是菩薩道也、

故南無阿彌陀佛者汝等所行是菩薩道也。　阿彌陀佛者實相也、
南無者資生產業也、
故南無阿彌陀佛者資生產業與實相不遠戾也。
南無者現象也、　阿彌陀佛者本體也、
故南無阿彌陀佛者體象不一不二也。
南無者始覺也、　阿彌陀佛者本覺也、
故南無阿彌陀佛者始覺本覺還同一致也。
南無者修也、　阿彌陀佛者性也、
故南無阿彌陀佛者修性不二也。
南無者主觀也、　阿彌陀佛者客觀也、
故南無阿彌陀佛者主客一致之知識也。

（この篇は先生自用の『宗教哲學骸骨』に挾める罫紙に手記せられたるものにて、其の書風より察するに、恐らくは明治二十七年頃の記ならむ。）

三、信仰條目

一。主觀客觀（卽ち我と萬物との實在）を信ず。
一。我認識する所は、主客兩觀の元素より成立せる現象界なることを信ず。
一。主客兩觀の實體は不可知的なることを信ず。
一。不可知的なるものは、一とも二とも名狀すべきにあらざれども、言詮上には、假りに之を一と談ず。故に主客の本體一なりと信ず。
一。兩觀の作用は一本體の作用なりと信ず。
一。兩觀の理法は一本體の理法なりと信ず。
一。不可知なるものは、有限とも無限とも名狀すべからずと雖も、吾人の限極を超えたるが故に、言詮上には之を無限と談ず。故に主客兩觀の本體は無限なりと信ず。
一。無量無限の一本體之を阿彌陀と稱す。故に之を擬人して阿彌陀を信ず。
一。十方三世中、確實なるは現在目前なるを信ず。

一。無實驗の時處は可得有なれども、到底推測比說的に談じ得べきのみ。故に寧ろ不可知と一括し置くの可なるを信ず。

一。本體は無始無終不生滅のものなりと信ず。(理法作法亦然り)。

一。一本體の理法なれども、現象界に於て、主觀の理法、客觀の理法、卽ち論法、數理の二者と分かるることを信ず。(因果相關之理法、其存相依之理法)。

一。論法の第一理法は、因果相關之原理とす。故に總て主觀的現象は、因果の理法に統制せらるゝものなりと信ず。

一。無、有を生じ、有、無に歸すと云ふは、因果の理法に背反するが故に、有は常に有なることを信ず。

一。主觀卽ち心の不滅なることを信ず。

一。心の變化は、因果の理法、卽ち阿彌陀佛の神力に支配せらるゝものなることを信ず。

一。心のみならず、萬物皆悉く阿彌陀佛の神力に支配せらるゝことを信ず(他力)。

一。宇宙萬有は阿彌陀佛の顯現なるが故に、妙と云へば至妙、淨といへば至淨、殊勝と云へば殊勝の至極なりと信ず。

一。阿彌陀佛を知らざるを迷とし、之を知るを悟りとすることを信ず。

一。迷より悟に至るを往生、或は成佛と云ふ(迷を此土と云ひ、悟を彼の土と云ふ也)。

(是れ先生が明治二十七年の頃、須磨に靜養中、自ら半切れに記し置かれしもの、また以て、先生が當時の信仰如何を伺ふべし。)

四。佛陀略解

熟、宇宙の萬物を觀察し、森羅の現象を討究するに、物體の本體眞性は、眞、善、美妙の體性にして、その存するや無始無終、その至れるや無際無涯、眞理を以て行相とし、萬化を以て作用とするものなることを知る。その大や宇宙を包括すと雖も、その小や極微に入り、その久や三世を貫極すと雖も、その短や刹那に在り。所謂、之を舒ぶれば六合に亘り、之を卷けば密に隱るゝもの也。吾人の思